

2016 年度卒業論文
小熊英二研究会 B2
総合政策学部 4 年
学籍番号 71200484
飯田 真祐

スノーボーダーのキャリア形成から見るポスト工業化社会との共存関係

フィールドワークによる社会学的考察

目次

要旨	3
序論	5
1 章 研究背景	5
1-1 問題意識	5
1-1-1 キャリア形成に対する疑問	5
1-1-2 スノーボードにおけるキャリア形成の問題	6
1-2 研究目的	8
1-3 研究対象	8
2 章 研究方法	9
2-1 データ収集と分析	9
2-2 作業仮説	10
3 章 先行研究と理論的枠組みの検討	11
3-1 先行研究	11
3-1-1 スポーツにおけるキャリア形成	11
3-1-2 自営業研究	11
3-2 理論的枠組み	12
3-2-1 ポスト工業化社会とアクションリサーチ	12
3-2-2 場の理論	13
本論	13
4 章 スノーボードでのキャリア形成	14
4-1 高校からスノーボードへ	14

4-2	スノーボードの特殊	1 5
4-2-1	スノーボーダーの文化的な背	1 5
4-3	プロ資格の取得	1 7
4-3-1	資格を持たないプロ	1 7
4-4	プロスノーボーダーの活動とネットワークの形成	1 8
4-5	ビデオ制作	1 9
4-5-1	ロケハン	2 0
4-5-2	冬山での撮影	2 1
4-6	スノーボーダーの階層的位置	2 2
4-6-1	プロスノーボーダーの働き方	2 3
5章	アウトドア体験ツアー創業から2014年まで	2 4
5-1	アウトドア体験ツアーのはじまり	2 4
5-1-1	湖について	2 5
5-1-2	町と村	2 6
5-2	2011年の活動	2 7
5-3	2012年の活動	2 7
5-4	2013年の活動	2 7
5-5	2014年の活動	2 8
5-5-1	冬の活動の新たな動き	2 8
5-6	シーズン前の準備と試行錯誤	2 9
6章	アウトドア体験ツアーの活動内容	3 0
6-1	アウトドア体験ツアーの所在地	3 0
6-2	活動の概要	3 1
6-3	メインとなるアウトドア体験ツアーの内容の例	3 1
6-4	カヤック体験ツアーのコース	3 2
6-5	ガイドから見たあるシーズンの1日の流れ	3 2
6-6	朝の準備	3 2
6-6-1	ツアー開始前の行程	3 3
6-6-2	ツアーの開始からカヤックに乗るまで	3 4
6-6-3	カヤックへの乗船	3 5
6-6-4	湖での行程前半	3 5
6-6-5	湖での行程後半	3 7
6-7	ツアーの終了	3 8

6-8 朝のツアー終了後の行程	38
7章 周囲との繋がり	39
7-1 ある年の湖周辺の同業者との関係	39
7-1-1 喫茶店との関係	40
7-1-2 村の宿泊施設との関係	41
7-1-3 ハンバーガー屋大宮との関係	41
7-2 犬を通じた繋がり	41
7-3 スノーボーダーの繋がり	42
7-4 新しい関係性	42
結論	43
8章 分析と考察	43
8-1 ポスト工業化社会と木村の再帰的關係	43
8-1-1 スノーボードでの技術向上とツアーガイドでの技術向上	44
8-2 スノーボードによって作られた想像力	45
8-2-1 スノーボーダーの自己目的的な性向	47
8-2-2 最適経験	47
8-2-3 チクセントミハイらのフローの概念	48
8-2-4 自己目的的について	50
8-2-5 自己目的的パーソナリティ	50
8-3 想像力と技術の再帰性	52
おわりに	52
参考文献(脚注で触れたもの以外)	53

要旨

本研究は2011年8月から2015年9月までに元プロスノーボーダーの営むアウトドア体験ツアーに参加して行ったフィールドワークを中心にした日本のスノーボーダーのキャリア・地域・文化の総合研究である。

フィールドワークで集めたデータをもとに研究対象である元プロスノーボーダーのキャリア形成はどのように行われてきたかということを中心に、スノーボーダーの現状を学問的な視点で分析し記述した。

理論的な枠組みとして「再帰的近代化」を基本とする「ポスト工業化社会」と「場」の移動の概念を使用した。

研究対象のスノーボーダーは高校卒業において、その地域性から自動車関係の大工場への就職という選択の圧力があつた。研究対象は「そこに板があつた」¹という理由でスノーボードの世界にキャリアの場を移す。そこで研究対象は技術を磨き経験を重ねてプロスノーボーダーになる。

スノーボードは特殊なスポーツであり競技的な側面と芸術的、対抗文化的な側面をもつ。そのスノーボードを続けるためスノーボーダーたちはそれぞれに多様な仕事やキャリア形成を行っていた。また研究対象を含めスノーボーダーたちはキャリアを継続させるために様々なアルバイトや非正規労働を行うこともしていた。

スノーボード業界は一時期の好調から、一転不況とも言える業界の規模縮小などによる収入源の減退という事態を経験する。映像表現を主な活動としていた研究対象はスノーボードを引退し、それとは異なる分野であるアウトドア体験ツアーの自営業主として新しい場への移動を行う。

新しい場所で始めた事業はスノーボードで得た経験とネットワークを活かすことで少しずつ軌道に乗せることができた。

このように行われたキャリアの形成について、研究対象を中心としてみた場合、現在、地域の自営業者どうしの新しい場として信頼によって構築された相互扶助のネットワークが形成されつつある。

また本研究を通じた分析から、木村を代表としたスノーボーダーとポスト工業化社会との再帰的な共存関係が見られた。ポスト工業化社会における就職システムという選択肢を選ばず、再帰的近代化によって増大化した選択肢の1つであるアルバイトをしながらプロスノーボーダーなるというキャリアを選択する。

その後スノーボードで培った想像力を使い、新しい事業を軌道に乗せる。その成功により研究対象者は新しいネットワークを形成し、社会に働きかけることでポスト工業化社会とスノーボーダーとの作り作られる再帰的な共存関係があるのではないかと結論した。

またスノーボードは他のスポーツと違いルールがないため、そのルールを作るということがスノーボーダーの想像力を伸ばし、自ら作ったルールの中で集中することによって技術を向上させ、またその技術の向上によって想像力が発達すると考え、ルールを作ることによる想像力と技術の再帰的關係という仮説を形成した。

¹ 研究対象者からの聞き取りによる

序論

1 章 研究背景

本章では序論として研究背景を述べる。

1-1 問題意識

研究背景として問題意識を述べていく。

1-1-1 キャリア形成に対する疑問

産業社会から高度な分業が進んだ現在、日本において多くの職業が存在する²。新しい職業は常に生まれ、また消える職業もある。その中から私たちは自由に職業を選べると思えることがある。またその職業によって生活の様式がほぼ決まるとも言える。

その職業の選択において私たちは一つの職種において違う組織に移動する時もあるれば、また前職とは違う職業に就くこともある。

近年、職業の選択を含めキャリア形成という言葉が定着してきており、金井（2002）は「キャリアとは簡単に言うと長期的な仕事生活のあり方に対して見出す意味づけやパターンのことを言います。環境・時代の中で自分らしさを追求する道にしていくには、節目はしっかりとデザインすることが大事になってきます。」と説明している。

そうしたキャリア形成において職業を選択する際に私たちは家族環境や地域など目に見えない様々な圧力を受けていることが社会階層の研究では述べられている³。

また現在も取りざたされている格差問題や女性の労働問題⁴などを考えた場合、はたして私たちは職業、キャリアの選択を本当に広く選べるようになってきているのか、ま

² 独立行政法人 労働政策研究・研修機構『第4回改訂 厚生労働省編職業分類 職業名索引』, 2011、によると採録した職業名の数は一七、二〇九（一九九九年、二〇〇八年より減少）あり、一三歳のハローワーク公式サイト <http://www.13hw.com/home/index.html> , 2016/01/21 アクセス、では五一四の職業、また池上彰 やりたい仕事がある！ 小学館, 2005、によると七四一職が紹介されている。

³ 竹之下弘久『現代社会ライブラリー13 仕事と不平等の社会学』弘文堂, 2013より、初職や現職達成における父不在・無職の影響、また日本において現職の職業的地位は学歴よりも初職の効果の方が大きいことが述べられている。

⁴ 格差問題については濱口桂一郎『新しい労働社会 -雇用システムの再構築へ』岩波書店, 2009と筒井淳也『仕事と家族』中央公論新社, 2015に依拠。女性の労働の問題についてはレナード・ショッパ『最後の社会主義国 日本の苦闘』毎日新聞社, 2007に依拠。

たそうした選択肢を実際に選べるようになって、それらの選択肢を選んだ後はどうなっているのだろうかという疑問が起こる。

例えばテレビのニュースを見ていると、トップレベルにいるスポーツ選手が小学校の体育館を訪れ、子供たちを前に「夢を諦めずに努力することの大切さ」を話している光景を目にすることがある⁵。こうした光景から夢を追う豊かさが見える一方で、その夢を叶える一握りの人たち以外の人々も豊かに人生を送ることができているのだろうかと考え、またこういった現象はスポーツ以外の様々な職業分野でも起こっているだろうと想像する⁶。

1-1-2 スノーボードにおけるキャリア形成の問題

特にスポーツの世界は競争が激しく競技者としての寿命も存在する。その環境においてプロスポーツはキャリアを重ねることが非常に難しい分野の一つであると言える⁷。

そのような状況の中でプロスポーツ選手の引退後の新しい職業、つまりセカンドキャリアへの注目が集まっている⁸。日本においてメジャースポーツであるプロ野球やサッカー⁹では、こうしたセカンドキャリアへの制度的な取り組みが課題を残しつつも進んでおり一定の成果を見せている¹⁰。

ではそれらのプロスポーツとして確立されているメジャースポーツ以外のスポーツではどうだろうか。スノーボードは1998年の冬季長野オリンピックで競技として正式採用され、2014年ソチオリンピックで初めて日本人メダリストを排出した経緯から、スキーなどに比べスポーツ競技として遅く認識されているだろうと考えられる。一方、レジャー白書においては98年から余暇活動への参加・消費の実態調査の項目に初

⁵ 現時点での新しい事例では、朝日新聞「夢、目標に変えること」ラクビーW杯・リーチマイケル主将母校で講演 /北海道 2015年11月07日 朝刊 p29などが挙げられる。

⁶ 本研究では立ち入らないが例えば芸能の分野一般やポストドクターの問題など。

⁷ TBS『プロ野球戦力外通告 クビを宣告された男達』

<https://www.facebook.com/firedsportsman/> 2016/01/21、より例えば代表的な例を挙げるとプロ野球選手などが挙げられる。

⁸ 日本におけるセカンドキャリア研究はプロサッカーのJリーグやプロ野球の分野を中心に行われている。それらの研究においてセカンドキャリアという概念は概ね「引退後の新しい職業」として扱われている。石森真由子 丸山富雄『プロ競技者の職業的再社会化モデルの構築とその検証に関する研究』, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, Vol. 4, 2003、重野弘三郎, 川西正志, 柳敏晴, 野川春夫『Role exit theory から見たプロサッカー選手のセカンドキャリア到達過程の事例研究』, 日本体育学会大会号 (51), 161, 2000-8-2、より。

⁹ 第一生命 夏休み子どもミニ作文コンクールアンケート 第26回「大人になったらなりたいたいもの」(2014年7~9月実施) 2014年より、1位サッカー選手2位野球選手とありこの2つのスポーツが子供に与える影響は少なくないといえる。

¹⁰ 鈴木裕輔『日本プロ野球におけるセカンドキャリア形成の現状と課題』, 野球文化學會, 2008, <http://repo.lib.hosei.ac.jp/handle/10114/2238>

めてスノーボードが出てきていることから¹¹一般的にはスポーツ競技としてよりもレジャーの一環、遊びとしてスノーボードは認識されているだろうと推測される。

スノーボードを行う人をスノーボーダーと呼ぶがスノーボーダーにもプロが存在する。日本においてスノーボードの公式機関は JSBA(日本スノーボード協会)と SAJ(全日本スキー連盟)がある¹²。現在 JSBA は公認大会などを通して一定の資格を有したものにプロ資格を発行している。一方 SAJ はオリンピックに出場するための国内資格制度や強化を中心に取りまとめを行っている。

こうした制度がある中プロスノーボーダーと呼ばれる人々の中にはプロの資格が自らの収益に対して有効と考えず資格を持たないで活動する者もいる。またプロ野球やサッカーとスノーボードの産業の規模や収益構造を比べて考えようとした場合、プロスノーボーダーがいかにキャリアを形成するのが困難かは容易に想像できそうである。

そうした困難さに加えてスノーボーダーたちは大きな怪我のリスクを持ち、再起不能になる恐れがある。そうした理由から強制的にキャリアの変更を余儀なくされる場合もあるが、それでも彼らはスノーボーダーとしてのキャリアを進んでいる¹³。

また、スノーボードにはメジャースポーツで整備されつつあるセカンドキャリアにおける年金や職業斡旋制度の整備がなく、周辺事業への移動などそれぞれの難しさは多分にあると言えるだろう。

通常のスポーツ選手のキャリア形成で想定されている移行期(トランジション)は、例えば町のチームから学校のチーム、それから企業やプロといったものが想定されている¹⁴。このような移行期を想定しているいわゆる学校スポーツはやはり野球やサッカー

¹¹財団法人 余暇開発センター レジャー白書 '98 平成10年 p28

¹² 日本スノーボード協会 <http://www.jsba.or.jp/> 2016/01/21、公益財団法人日本スキー連盟 <http://www.ski-japan.or.jp/> 2016/01/21

¹³ The Huffington post 2015年02月19日 『岡本圭司さん「道が見えてきた」 転落事故で下半身麻酔のスノーボーダーが心境明かす』 http://www.huffingtonpost.jp/2015/02/18/keiji-okamoto-message_n_6709712.html 2016/01/21

¹⁴ A. プティパ/D. シャンペーン/J. チャルトラン/S. デニッシュ/S. マーフィー, 訳田中ウルヴェ 京, 重野弘三郎『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』, 大修館書店, 2005 より。また金井(2002)によるとブリッジスにおけるトランジション論においてトランジションとは「日常語としては「転機」と訳され、生涯発達の心理学(life-span developmental psychology)の文脈では、「移行」ないし「移行期」を指す言葉である。人生やキャリアは、安定期(流されてドリフト状態でも大丈夫な時期)と移行期(しばしば危険でもある節目)の繰り返しだというのが、生涯発達論やキャリア論に就るライフサイクルの視点だ。馬車の轍の喩えでは、「岐路」

などが多く、それらに携わる選手たちの移行期やキャリア形成には大きく学歴が作用していることも調査されている¹⁵。

そうした状況でスノーボードのキャリア形成においてほぼ町や学校といった場が介入することは考え難い。おそらくスノーボーダー達はほぼ独力に近い形でキャリアを形成させているのではないだろうか。またそうしたキャリア形成を行っている場合、どのようにキャリア形成を行っているのだろうかという疑問が起こってくる。

1-2 研究目的

問題意識より、本研究ではプロスノーボーダーが決して恵まれているとは言えない環境でどのようにキャリア形成を行っているのかの1つの事例を明らかにしていきたい。また、その課程で見えてくるスノーボーダーの全体像を可能な範囲で把握したい。

さらにスノーボーダーのキャリア形成と全体像を明らかにしていくにあたり、フィールドワークによってキャリア形成の当事者となることによって、内部者からの視点と、その内部者だけでは見ることのできない学問的な視点として、社会学などで使われる理論を用いて事象を理解することを本研究の目的とする。また、逆にそうした理論に当てはめただけの視点とならないように研究者と協力者の体験という視点も記述していきたい。

加えてこれらの調査と分析から新しい発見と仮説の形成が行われることを期待する。

1-3 研究対象

現在スノードは過渡期にあり、激しい世代交代が行われ日本におけるトップレベルのスノーボーダー達は10代が中心である。またオリンピックに競技として採用されてからスノーボード自体も大きくその特性を変化させつつある。

その一方、日本でスノーボードが競技化された創生期からプロとして存在するスノーボーダー達の一部は現在においてもなお現役としてスノーボード業界に携っている¹⁶。スポーツの世界、またスノーボードにおいて典型的なプロスノーボーダーと呼べる存在

にさしかかった地点・時点、クロスロード（四つ辻）などに立った時がトランジションにあたる。」としている。

¹⁵ 橋木俊詔 齋藤隆志『スポーツの世界は学歴社会』, 図書印刷株式会社, 2012 より

¹⁶ プロスノーボーダーズアソシエーションアジア

<http://www.psa-asia.com/ridersinfo/profile/profiles/profiles.php?profileID=3000014>
2016/01/21 より竹内正則などがその代表としてあげられる。また一方で、例えばプロ資格はスポンサー契約がない場合でもその資格を発行する JSBA に登録料を払い続けていれば資格は継続する。そうした例もあり競技を含めてプロスノーボーダーの現役の定義は曖昧であると言える。

はいないと言えるが、個人のキャリアを分析の中心に置くことは、その関係から派生的に見えてくるスノーボーダーたちや関係者の調査に繋がり、研究目的であるキャリア形成の過程とそれらを取り巻く仕組みを明らかにできるのではないだろうかと考える。

そこで本研究の研究対象として90年代後半から2000年代にかけプロスノーボーダーとしてキャリアを重ね、この時期のスノーボーダーとして一番の活躍の場所である映像表現においての実績を残し、また競技者としても一番高いレベルの成績を残した木村を研究対象とする。2015年現在アウトドア体験ツアーを営み、ある程度の収入を得つつ¹⁷繁忙期の前後である6月と11月は趣味であるサーフィンと冬はスノーボードを楽しむという生活サイクルが定着しつつある。

日本のスノーボード史に関して依拠するための研究はほとんどないと仮定できるが、時期的に検討して研究対象は創生期と現在、競技の一線で活躍する若手のプロスノーボーダーの中間に位置する存在と考えても良いと言えるだろう。

木村は1990年代に高校を卒業しスノーボードを始め、プロ資格を取得し幾つかの大会での成績と映像作品を残した後引退する。その後アウトドア体験ツアーのガイドを個人で始める。こうした木村のキャリア形成の過程で木村との繋がりのあるプロスノーボーダーを含めた関係者たちを分析することで日本におけるスノーボーダーの現状も研究対象として視野に入れたい。なお、本研究での研究対象とするスノーボーダーはいわゆるソフトブーツを履いた「フリースタイル」とカテゴリーを分けられる場合がある。しかしそういった境界はスノーボードの自由を尊重する文化性から意味をなさないと考える。そのためスノーボーダーをカテゴリー分けして絞ることはしていない。

あわせて本研究対象からもれる対象と事例の存在は避けることが出来ない。そうした事例を研究対象と出来ないことは本研究の限界であり、また研究課題として残る。

2章 研究方法

2-1 データ収集と分析

参与観察者の役割関係のタイプにおける「完全なる参加者・観察者としての参加者・参加者としての観察者・完全なる観察者」という4つのカテゴリーのうち、完全なる参加者として研究対象者の行なっているアウトドア体験ツアーガイドの仕事と生活をともに行うという参与観察を行った。期間は2011年の8月から2015年の9月まで毎年夏季におよそ1ヶ月単位でこの調査を行なった。

¹⁷ アルバイトを除き500万円弱、聞き取りによるとスノーボーダー時代は最大1000万円弱であった。

加えて、その他資料、インターネットの SNS を使用したデータ収集、関係者への聞き取りによるマルチメソッド（多元的方法）を含めたフィールドワークを行った¹⁸。参与観察の現場では研究者は研究対象者と密接なラポール（協力関係）を形成した。

本研究ではインフォーマントである研究対象者のキャリア形成を支援し共にキャリアをつくるという側面もあるため、本研究でのフィールドワークはアクションリサーチの概念も入り得ると考える¹⁹。

なおフィールドワークで行った聞き取りについてはフィールドの状況を鑑みて非構造化面接として全て行っている。また集めたデータの分析は言説の分析を含め、社会学を中心とした理論的な枠組みの検討を行い、その理論を通したエスノグラフィー（民族誌的調査）として記述を行う。特に研究対象者との関係によって現象した体験というものを重視して記述していく。

またそうした方法をとることによって理論的な枠組みを使って行う視点による決定的な偏りというものをさけることも意図している。

本研究論文では研究対象者や関係者、またその他地名などは倫理的配慮から仮名とすることにする²⁰。また調査で得られたデータや数値について研究対象者の特定などに繋がるものについては論文内における具体的な数値などの表記はさける²¹。

2-2 作業仮説

フィールドワークを通して研究対象者のプロスノーボーダーと犬を使ったアウトドア体験ツアーのガイドという2つのキャリア形成を通してこの2つの仕事が自営業的性格を持つという共通性と、その2つにおいて自然を使った遊びを利用しているという共通性が見えるのではないかと考える。つまり前職のキャリアでの経験とそこで身につけた指向性をキャリア移動の際に別の職業においても活かすことができたために研究対象のキャリア形成が上手く行ったのではないかと考える。

さらに研究対象への聞き取りから研究対象者である木村が高校を卒業し、プロスノー

¹⁸ 佐藤郁哉『フィールドワークの技法』, 新曜社, 2002 に依拠する

¹⁹ 植村, 高畑, 箕口, 原, 久田(編)『よくわかるコミュニティ心理学』, 2006 によると「アクションリサーチとは社会・コミュニティにおける問題解決のために、厳密な研究方法によって行われる実験と現場での実践を連結した循環的研究方法。その研究法の目的として①基礎的な研究によって科学的知識の蓄積に貢献すること、そして②現場のフィールドにおける有効性の検討を行い基礎研究にその結果をフィードバックすることである。」とある。

²⁰ やまだようこ・麻布武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也 編『質的心理学ハンドブック』, 新曜社, 2013 において述べられている研究倫理の原則に基づき判断した。

²¹ なお本研究で使用した資料の出典についても一部地域名や個人名が含まれているものは本論文への掲載を行わない。

ボーダーの道へと進み、現在までのキャリア、つまり社会移動における選択に対してポスト工業化における日本の社会的枠組みの影響が少なく無いと考えた。またそうした影響を受けた木村が自営業として軌道に乗り、新しい土地に馴染むことが出来ることによって、新しい関係が構築されたのではないかと考える。またそうした関係を築くことによって自らが影響を受けた社会的な枠組みに対し、少ないながらも再帰的に影響を与え始めていると推測する。

また、こうしたキャリア形成の結果としてそれぞれスノーボーダーと自営業のキャリアを通じた繋がり、ネットワークというものが生まれているのではないかと考えている。

以上のことからさらに見えてくるものは、2つのキャリアとネットワークを形成する土台となるものとして、木村がサブカルチャーのような独自の文化をもつスノーボーダーのマイノリティなネットワークの場から、そこで培った経験を活かし自ら形成しつつある自営業者のネットワークという新しい場へ移動をおこなったのではないかという仮説をたてる。

3章 先行研究と理論的枠組みの検討

2-1 先行研究

スノーボーダーのキャリア形成過程を分析する先行研究はないが関連する研究を検討していく。

3-1-1 スポーツにおけるキャリア形成

スポーツ分野におけるキャリア形成研究では吉田（2013）による「競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究」がある。この研究はインタビューによるライフヒストリー法を通して、サッカーエリートにおけるキャリアのトランジションで起こる危機や葛藤を乗り越える過程を描いている。また分析は主体的社会化論の枠組みを用いて主体性に注目しスポーツにおける社会化を論じている。

本研究においてはスノーボードがスポーツとして特殊な側面を持つこと、また主体性による社会化が想定している社会と本研究で想定している社会において主体性を作る社会的作用に違いがあると考え、またアスリート本人による葛藤と本研究の示唆する社会的な圧力に違いがあると考えたため、本研究においては主体性による社会化の概念は使わないことにする。

3-1-2 自営業研究

自営業における研究で本研究に関連して述べられている研究は鄭賢淑(チャンヒョンスク)による『日本の自営業層』がある。この研究では、日本の自営業を一つの階層とみなし戦後を中心とした自営業層全体について述べている。一方近年のSOHOに代表されるテレワークを中心として扱い、個人または家族就労のみで構成される自営業を「自己雇用」と定義して、自己雇用者の新しいワークスタイルについて述べた昆野(2006)の『自己雇用者のワークスタイルとネットワークキングの研究』がある。こちらの研究は企業における社内的なつながりの強さというものが足りない自己雇用者がソーシャルキャピタルとして自己雇用者支援組織を活用し、それらの組織で発達するネットワークについて分析している。またこの研究においてネットワーク論について詳しく検討されている。また、同様の研究としてリクルートワークス研究所の行った『自営業の復権』という研究がある。この研究では昆野の研究よりさらに踏み込んで新しい自営業の形について述べられている。

本研究ではこれらの研究で述べられていないプロスノーボーダーという自己雇用者のキャリア形成がどのような形で、またどのように行われるかに注目する。またその過程を参与観察による記録に基づいて記述しようとしている。

本研究の意義としてこれらの研究を引き継ぎ、そこに別の角度から見た社会構造の一部を明らかにし、多様なキャリア形成の一つの事例を提示し、今後の研究発展につながることを意図している。

しかし本研究の限界として研究の規模を考えた場合、複数の視点から個別のキャリア形成を見るという面が本研究の目的としてあるため、一つの視点からスノーボードやレジャーといった個別の産業に対する分析、また本研究に出てくる地域を歴史的な背景を含めより深く検討することができない部分がある。またそれらの研究を行なっていくことが本研究以降の今後の課題となる。

3-2 理論的枠組み

本論で使用する理論的枠組みを検討する。

3-2-1 ポスト工業化社会とアクションリサーチ

本研究では作業仮説に基づき理論的枠組みとしてポスト工業化社会を想定し特に再帰的近代化の理論を根拠とする²²。こうしたポスト工業化社会の中で研究対象者のキャ

²² 日本におけるポスト工業化という表現と枠組みは 編著 小熊英二, 著者, 貴戸理恵, 菅原琢, 中澤秀雄, 仁平典宏, 濱野智史『平成史』, 中央精版印刷株式会社, 2012、小熊英二『社会を変えるには』, 株式会社講談社, 2012、小熊英二『私たちはいまどこにいるのか』, 毎日新聞社, 2011

リア形成がどのように行われたかを検証していく。

一方で、個人のもつ意味の体系が生きる世界や体験を形づくるという考え方は構築主義と言われる。アクションリサーチはその構築主義の流れをくみ、対象者との相互作用のなかで作り上げる過程も重視し、社会の変化や改善を目ざしてその社会状況に働きかける²³。そのため本研究の方法も再帰的な理論の枠組みで行われるものと言える。

3-2-2 場の理論

また研究対象の木村がキャリア形成において社会移動を行う際に、学校という場からスノーボード、そしてレジャーガイドという場への移動が見て取れる。ポスト工業化社会を土台として、こうした場の移動について注目する。本研究における場の概念は『ディスタンクシオン』でブルデューが述べている場の力学と『失われた場所を探して』においてメアリー・C・ブリントンが述べている場に依拠する。

ブルデューの場における象徴資本とハビトゥス、また一方でのブリントンでは弱い紐帯による信頼²⁴のネットワーク、両者では社会関係資本について述べられている。本研究における象徴資本とハビトゥスはスノーボードが持つマイノリティな文化、またスノーボードという場で得た経験、身につけたものとして捉える。

ネットワークに関してはスノーボーダーでのキャリアで作られた関係とレジャーガイドのキャリアを通して作られた関係を自営業的なネットワークとして捉えている。

これら場の理論はポスト工業化社会の枠内で述べられていると言え、再帰的近代化の理論と親和性が高いと考える。

本論

本論では理論的枠組みに沿い、フィールドワークで得た研究対象者である木村のキャリア形成の変化を学校からスノーボードへの移動、そしてアウトドア体験ツアーというそれぞれの場の移動を記述する。またその移動の背景として存在するポスト工業化社会の枠組みを通して見た木村やその周囲の人間の位置というものを記述し、そこで築かれたネットワークについても触れていく。

またそれぞれの場で木村が積み重ねた経験とそれぞれの仕事の内容を記述することで結論での分析につなげていく。

に基づく。

²³ やまだようこ・麻布武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也 編『質的心理学ハンドブック』, 新曜社, 2013 より引用

²⁴ 信頼については山岸俊男『信頼の構造』, 東京大学出版会, 1993年に依拠する。

4章 スノーボードでのキャリア形成

本章では木村のアウトドア体験ツアーのガイドに繋がるスノーボードでのキャリア形成とスノーボーダーの活動の実情とその活動によってできるネットワーク、それらを含めたスノーボードという文化的背景を持つ場について記述していく。

学校からスノーボードという学校と企業の持つ就職における枠組みの外におけるトランジションとスノーボードがもつプロスポーツとしては特殊な環境の中にいる木村の活動と経験を通じたキャリア形成を追う。

4-1 高校からスノーボードへ

木村の在学した高校のある地域は輸送機械製造業の工場が複数あり、その地域性を特徴づけている。ある年のその地域における工場出荷額は2兆円程度を記録している²⁵。人口は20万人程度。高齢者は36000人程。木村によるとある会社の駐車場の駐車位置の優先順位はその地域に工場のあるメーカーの車種から優先的に駐車位置が決められているということであった。

木村の高校における卒業時の自分も含めた周りの進路は自動車工場への就職か、または県外への進学しかなかったという。その選択肢の中で木村はたまたまスノーボードの板が目の前にあったからスノーボードを始めたと述べている。

そうして木村は1990年代中頃に高校を卒業し、アルバイトをすることで資金を作りスノーボードの技術を磨いていく。同じ時代にプロスノーボーダーとして活動していた木村の同世代のライダー²⁶たちも理由の違いはあるが似た経緯をたどる者が多くいる。

木村は現役時代自らが中心となってプロのライダーを集めて映像作品を残している。その映像作品をともに手がけたスノーボーダーに中村、田中、大野、佐藤、山田がいる。彼らは木村と最大で3歳の年齢差で同世代と言える。

現在プロスノーボーダーとして活動している中村と山田は高校を卒業後、大学時代にスノーボードを始めた。山田は怪我のために引退したが、中村は現役を続けている。田中と大野は高校卒業後スノーボードを始めている。佐藤は高校卒業後、旧帝大の医学部に進みスノーボードを始め、その後大学を中退しスノーボードに専念した。彼らの世代ではスノーボードの普及の度合いから高校生ぐらいにようやくその存在を知り始めるといったことが多くある。

²⁵ 工業製品に対して年間商品販売額は1800億円程度の規模。

²⁶ プロスノーボーダーや大会に出るスノーボーダー、スポンサー契約をしているスノーボーダー全般をライダーと呼ぶことがある。

この木村の世代以降2002年ソルトレイク・シティオリンピックにおいて5位に入賞する中井孝治以降、国母和宏、平野歩夢、平岡卓など幼少、年少期からスノーボードに専念していた世代の活躍がオリンピックなどスノーボード競技で目立ち始める²⁷。

こうした新しい世代のスノーボーダーがオリンピックで活躍する一方でそれ以外でも活動するスノーボーダーがいる。野球やサッカーなどでは試合でプレーする以外でプロとして現役で活動することはない。また個人競技のテニスやゴルフではティーチングプロのような存在がいるがスノーボードには映像表現による活動など他のスポーツにはあまりないと考えられる活動の側面がある。

4-2 スノーボードの特殊性

スノーボーダーがプロとして活動する場合大きくわけて2つに分類できると言っている。

1つはスキー場だけでなく自然の山の地形や時には街中などあらゆるシチュエーションにおいて自らの発想において滑りを表現し、それを映像や写真などに収め動画サイトやDVD、または雑誌などに露出をすることを主な活動とし、時にはムービースターと言われるタイプのライダーである。

もう1つはオリンピックやXゲームと呼ばれる大きな大会に出場し、優秀な成績を収めることを重視する競技型のライダーがいる。

この2つのライダーの形態は出演する映像作品や出場する大会のレベルの違いはあるが、主な収入の形は近似している。彼らは自らが使用する道具であるヘルメットや板などにメーカーのステッカーを貼ることで自らが広告塔となり収入を得る。これに加えムービースターのタイプは例えば雑誌からの写真使用料からの収入。一方で競技型のライダーは大会の賞金などが挙げられる。F1やテニスなど個人競技のスポーツの広告形態に似ているかもしれないが、これらのスポーツにおけるCM出演などで行う自己の表現活動は成績に左右される競技に対する副業とも言えるかもしれないが、スノーボーダーはその自己表現自体が本業となり得るので、役者や芸能などのような側面をあわせ持つ。こうしたスノーボーダーの特殊な状況はスノーボードの持つ歴史的な背景も関係している。

4-2-1 スノーボーダーの文化的な背景

スノーボードが発祥したのは1965年頃アメリカである。雪の上でサーフィンをする

²⁷ 中井孝治、国母和宏、平野歩夢、平岡卓は実名。

ることを目的として始まったことが定説として語られている²⁸。1977年アメリカでバートン社が設立されてからスノーボードは本格的に普及し、80年代にハーフパイプ競技が行われるようになってからブームとなっていく。1979年には日本でもスノーボードの生産がいち早く行われ、1982年には日本スノーボード協会による大会が行われている。

その当時の日本のスノーボードにおいてもアメリカ同様にサーフィンとスキーを経験した者がその経験を活かし大会で活躍するなど、スノーボードに適応していった²⁹。その後の普及によって日本では余暇におけるスノーボード参加人口は2002年に540万人でピークを向かえている³⁰。

この発達過程においてスキー場との対立やスケートボードやロック、パンク、ヒップホップなどの影響を強く受け、カウンターカルチャー、対抗文化としての要素を強く含んでいく。そうした要素はスノーボードの自己表現としてのファッション³¹やグラフィック、音楽、映像など工業製品と関係した現代的な芸術性³²を持つ。その文化性の中に競技としてのスノーボードが存在していた。そのスノーボードは98年長野オリンピックを契機としてより一般的な競技、スポーツとしての側面を強めることになる。

こうしたスポーツとしての競技性の要素が大きくなる以前は映像表現などで活躍する、いわゆるムービースターといわれるスノーボーダーが競技においてもトップレベルで多く存在した。しかし2000年代以降こうした表現の重視と競技での勝利を両立するライダーは減り、スノーボードの表現性と競技性の棲み分けが強くなっている³³。

²⁸ スノーボードの歴史的背景また文化的側面については著者が2014年に執筆した研究論文『スノーボードの発達に影響を与える歴史的要素の比較』に依拠する。

²⁹ 永木耕介『ニュースポーツへの適応における事例的考察-88年・全日本スノーボード選手権優勝者を対象として-』, スポーツ教育学研究, 8巻2号, pp. 39~51, 1988を参照。当時サーフィショップがスノーボードを扱っていたという内容が記述されており、スノーボード専門店がないためサーフィンやスケートボードの店がスノーボードを扱い始めている様子が分かる。またスラロームが競技の中心で在ることが記述されている。そのため日本のスノーボードの歴史研究分野の現在在る数少ない先行研究となる。

³⁰ 公益財団法人 日本生産性本部 『レジャー白書2010』, 2010より。

³¹ 鷺田清一『モードの迷宮』, 中央公論社, 1989によると自己の身体は像として経験され身体は我々の身にまとう大地の衣服でありこのセルフイメージのモデルが社会的に通用することがファッションであるとされている。

³² 浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション1』, ちくま学芸文庫, 1995に依拠。

³³ <https://www.youtube.com/watch?v=VVJPHKfV1eo> adidas Snowboarding Welcome:Kazu Kokubo <https://www.youtube.com/watch?v=fzeknCLdMf8> 國母和宏-スノーボードの歴史に名を残したいKazu Kokubo Interview 2016/01/19よりオリンピックに出場した國母和宏は映像表現をするムービースターと競技に専念するスノーボーダーの棲み分けが進む過渡期を経験し、また自らはその両立を体現している最後の世代的存在として、自身の考えを述べている。

しかし 現在でも両立にこだわりを持ち、高いレベルで活躍するライダーも存在している。

4-3 プロ資格の取得

木村がプロとして活動を深めるきっかけの1つと言えるのが JSBA、日本スノーボード協会の認定するプロ資格の取得である。木村が資格を取得した当時はフリースタイル競技の分野ではハープパイプ競技のみであった³⁴。プロ資格を得ると JSBA の公認大会の出場やトヨタビッグエアーとよばれる国外ライダーも含めたテレビ放送のある大会の出場資格などが得ることができ、他の大会も含め出場に有利な条件が得られる³⁵。

プロ資格を得るには一定の要件を満たす必要があるが、木村が取得した当時は全日本選手権で3位までに入賞するか、もしくは JSBA の公認大会においてプロ資格を有するものから推薦を受け、大会に出場し一定の成績を収めることとアマチュアの大会でのポイント加算が条件となっていた。

4-3-1 資格を持たないプロ

一方で資格を取得せずプロのライダーとして活動する者もいる。木村と映像作品を共に作った中村は大学生時代からアマチュア時代の木村とともに各スキー場で行われる大会を転戦していた。この頃から木村と中村は雑誌メディアで紹介され注目を浴びていた。大会での成績や自ら滑る姿を映像に記録しスノーボードメーカーに送り、板やウェア、ゴーグルなどの物品などを支給されていた。

アマチュアの大会に出場するには JSBA から公認されたスノーボードショップに所属している必要もあり、その関係によってショップからのスポンサーもあった。

木村は大会の転戦中に資格を取得する。一方中村は大会中のアクシデントによる失格などで資格を取れずにいた。そのうちに写真を通した雑誌の露出が増え、その露出の度合いに合わせてスポンサーからの契約金が発生するようになった。この過程において雑誌のカメラマンなどとシーズンの行動をともにするようになり、中村は次第にプロ資格に対する価値を見いだせなくなっていった。

中村は首都圏から北東方面に離れた位置に住み活動をしているため、シーズンオフになるとスポンサー回りをを行うために春から夏場にかけて東京を訪れる。ある年の中村はシーズン中に行なった活動を自ら紙に書き込み、この紙をスポンサーに渡し契約の交渉

³⁴ 現在はスロープスタイルによるプロ資格取得がある。

³⁵ トヨタビッグエアーはテレビ放送もあり国内スノーボード大会における知名度が一番高いと考えられるが現在は行われていない。<http://www.toyota-bigair.jp/> 2016/01/20 を参照。

を行っていた³⁶。

中村の場合と別に、こうした資格をもたずプロとして現在も活動している立花がいる。立花の場合はスノーボードをはじめから資格取得の為の大会には最初から出ず、仲間のスノーボーダーと協力し映像表現を主な活動の場とするチームを作り、その動きに雑誌から注目をされ、また制作した映像に広告を出し契約するスポンサーを獲得していった。またこうした活動が注目されテレビ中継のある大きな大会にも出ることになる。

4-4 プロスノーボーダーの活動とネットワークの形成

木村はプロ資格を取得し活動を本格化させる。木村が主に行っていた活動はビデオの撮影であった。スノーボード発祥のアメリカでは既にビデオ作品で多くのライダーが有名になっており、それらのライダーと協力することで多くのスポンサーが集まる幾つかのビデオプロダクションが設立されていた。こうしたビデオ作品が定着すると、知名度のあるビデオ作品に出演することがスノーボーダーとしての実力とスタイルが認められたということになり、彼らにとってのステイタスとなっていた³⁷。

その一方、まだ日本のスノーボーダーによるビデオ作品は少ないため、多くのスノーボーダーはアメリカのビデオから影響を受け、そのスタイルを取り込んでいた³⁸。ライダー達は大会での競技をメインとして活動を行うものが多かった。

木村も大会での競技を行っている。12月頃から本格化するスノーボードのシーズン中は日本各地を回った。そのシーズンが終了すると春先にオフと契約を行い、夏から秋にかけては主に修行と言ってアメリカでスノーボードの技術を上げていた。そしてまたシーズンに入っていく。

木村の技術を上げるアメリカでの練習のサイクルは朝6時に起き8時頃からスキー場で滑り始め、夕方5時まではほぼ休憩を取らず食事や水も飲まず滑るという方法で行っていた。この練習をともにしたライダーの村山は木村が他の業界にいったらどうなっていたらと考えると述べている。海外の大きな大会やトヨタビッグエアーといった大

³⁶ この時の中村が交渉する契約金の希望額は300万円台。

³⁷ 編集人・野上大介『トランスワールドスノーボーディングジャパン 10月号』, トランス・ワールドジャパン株式会社, 2014より、スノーボードの歴史についての特集がある。映像の歴史の変遷にもふれ、映像作品のブームが大会やレース中心であったスノーボードにフリースタイルシーンを確立させ、ニュースクールというムーブメントを引き起こしたとある。スタンダードフィルム、マックダウなどが代表的なビデオプロダクションとして確立していく。

³⁸ 90年代後半から日本のビデオシーンが盛り上がりを見せる。代表的なビデオはシリーズ化されシーズンごとに発表されることになる。CHAOSシリーズ、ファーストチルドレンなどの作品がそれにあたる。CHAOSシリーズは

http://blogs.yahoo.co.jp/hisoft_hide/folder/1299644.html?m=lc&p=2 ,2016/01/20 を参照。ファーストチルドレンは <http://www.first-children.jp> ,2016/01/20 を参照。

会で成績を残した村山からみても木村の集中力は強いと感じられた。

この1年のサイクルは他のプロスノーボーダーも行うサイクルであるため、スケジュールをあわせ何人かで行動をすることもある。一方で大会の遠征先やアメリカやヨーロッパのスキー場で顔を合わせることで、似た活動をしているスノーボーダー同士の繋がりが構築されてくる。

またアメリカなど海外で集中的に技術を上げる時やシーズン中の拠点として同じ宿泊場所で寝泊まりをすることが多い。これを彼らは籠りと呼ぶ場合もあるが、こうした共同生活を通し彼らの繋がりは密接となる。

しかしそうした共同生活を通して技術を磨き、同じ撮影や大会をともにするスノーボーダー達であるが、それぞれの持つスポンサーやスノーボードのスタイルというものを追求するため、彼らは個人のスケジュールをもとに移動し活動するため常に同じスノーボーダー同士が活動を共にするという事は少なく、自律した個人事業主とも呼べる形でそれぞれの仕事と活動を行なっている。

同様にプロを目指すアマチュアのスノーボーダーたちもほぼ同じサイクルを行なっている。スポンサーから金銭的な援助のない者ほどこのオフの期間やシーズン中にアルバイトや副業をする頻度が上がっていく。そのためプロとアマチュアを含め境界なくスノーボーダーは生活サイクルを含めた濃密な共同生活とその後の活動のための分散を繰り返す。そのためスノーボーダーには自律したネットワークが築きあげられている。

木村がプロスノーボーダーとしての活動を始めた頃には、こうして出来た繋がりによって集まったスノーボーダー達の中に海外の映像に負けない映像を作ろうとする動きが起きていた。木村はその中に入り自らの活動の比重を映像作品制作に傾けることになっていく。加えて90年代後半以降ビデオカメラやパソコンなどの普及によって映像制作のコスト下がり、映像作品が作りやすくなったという背景も木村達の動きを後押ししている。

4-5 ビデオ制作

木村が大きくビデオ制作に活動の比重を移していくと12月頃からのシーズンの動き方に変化が起きる。それは大会への出場がテレビ放映のされる大きな大会などへ絞られ、残りの時間は雑誌と映像のシューティングと呼ばれる撮影に使うようになる。

ビデオ作品を制作する場合、一般的な内容の構成はビデオの冒頭のオープニングに音楽とともにスポンサーを紹介する。それからそのビデオに出演するライダーを1人ずつ紹介し、それが終わるとパートとって紹介したライダーの滑りを一人ずつ見せていく。それぞれのパートで音楽を一曲ずつ流していくので、一人のパートの長さは約3分から

4分となる。その時間の中で様々なロケーションを滑る映像を使う。大体1つの場所を滑る映像で6秒ほどだとすると1分で10カ所となり、1人のパートで使われるロケーションの数は30から40カ所ほどになる。同じ場所で違う滑りを見せる場合や、1つの滑りのシーンに10秒程かけたとしても20カ所近くのロケーションが必要となってくる。

こうした映像を撮影するにはシーズン中に様々な場所へ撮影に適した所を見つけるために移動して撮影場所を探さねばならない。そして見つけてもライダーが表現したい滑りが出来るようにその場所自体を加工する必要がある。

そのため1つのビデオ作品を作るにはシーズンを通した撮影活動が必要となってくる。そしてシーズン終了後に編集作業に入る。

次にその制作過程を木村が中心となって手がけた映像作品の例で記述していく。

4-5-1 ロケハン

映画の撮影を行う場合その撮影に適した場所を探す行為としてロケーション・ハンティング、ロケハンを行うが、スノーボードの映像制作においてもロケハンを行う。

木村を含めた映像制作に参加した中村、田中、大野、佐藤、山田らは大会などを含めたそれぞれのスケジュールにわせて動くが、スノーボードの映像制作を行うためのスケジュールは天候に非常に左右される為、非常に流動的である。基本的に晴天の日の撮影が一番良く、パウダースノーを滑る撮影では撮影前日の夜の天候も関わってくる。そのため常に携帯電話などで連絡を取り合い撮影のコンディションと行動のタイミングを合わせて集合し、撮影を行う。木村の撮影クルーには専属のカメラマンがいるがカメラマンが不在の場合などはライダー同士でも撮り合う。ライダーが撮影するロケーションを選び、その場所で何が出来るかを想像し撮影に必要なジャンプ台などアイテムと呼ばれるものを作るので、その場所における撮影環境づくりと撮影のアングルなどを含め、それらをライダーが決めて撮影を行うことが多い。

撮影場所は撮影の前日までにそれぞれの経験を持ち寄り相談し「あの山のあそこら辺の斜面がいい」「道脇から入れるあその場所に巨大なマッシュがある」³⁹など話し合う。

こうした撮影に向いていそうな場所を彼らはシーズン中の普段のスキー場への移動中などで常に回りの景色に気をくばり自分の目にうつる景色の中でスノーボードを使って何が出来るかを想像し、観察している。それは山だけでなく、市街地の建物や階段、

³⁹ マッシュとは木の上に雪がマッシュルーム状に降り積もった状態を指し、このマッシュルーム状の部分にスノーボードでジャンプをして板を当てることや、ジャンプの過程でマッシュの上を滑ることを行なって遊ぶ事ができる。

公園などあらゆるものに及ぶ。そうした一見スノーボードをしないような場所でもその場所に雪が積もれば彼らにとってはスノーボードが出来る場所になっていく。

そうした志向が強まると彼らは普段の生活をしていても常にそういった場所を探す事がくせとなり、町の階段の手すりや建物をみて「この場所でならこういった滑りできるだろう」と勝手に頭のなかにそのシチュエーションが浮かぶようになる。

またシーズン中のスノーボードをしない日に自動車であらゆる場所をまわり、雪のコンディションを確認しながら重点的にロケーションを探す行為も行う。山道を走りながら両脇に見える山を眺めてそれぞれ撮影ができそうな場所を探る。市街地でも同様に建物や階段あらゆるものを見てスノーボードで何が出来るかを観察する。

4-5-2 冬山での撮影

例えばスキー場に併設する登山ルートを使い撮影を行う場合、当日スケジュールの合ったメンバーでスキー場に集合し、その日のコンディションについて話しながらストレッチや朝食などそれぞれの準備を進める。そしてスキー場がオープンしたらゴンドラで頂上に向かう。ゴンドラを降りたら登山者名簿に記入をして用意しているストックを持ちスノーシュー⁴⁰を履いて撮影するポイントに移動する。

予め決めていた場所に到着するとライダー達はここでもう一度コンディションを確認する。そしてその状況に合わせてどのようなスノーボードが出来るかを考える。この時のアイデアは自らのレベルに合った発想ほどより具体的になる。例えばその場所の地形がジャンプをして着地をするのに適した場所であったら、その場所に設置するジャンプ台の方角や大きさ、形が具体的に分かりジャンプ台完成後の一連の滑りが想像できる。

ある程度撮影のイメージが固まったら全員でジャンプ台の制作を始める。それぞれ持ってきたスコップで雪をブロック状に掘る。ほったブロックをジャンプ台の飛び出し口が一番高くなるように、角度をつけて積んでいく。春先などの雪がゆるい場合は塩をまいて固める作業を行う場合もある。

ブロックを積みながらそれぞれのイメージをすり寄せて大きさを決め、ある程度ブロックが積み上がったところで細かい形の成形を行い、細部に雪を埋め、スコップで形を慣らして整形していく。

ジャンプ台が完成したらライダー達は試し飛びの準備をする。実際に安全にジャンプができるかをテストする。最初はスピードをつけるためのアプローチという飛行機でいう滑走路を滑り、大体のスピード感覚を体感する。またジャンプ台から着地地点に向け

⁴⁰ スキーで使える伸縮式の棒と雪上を歩きやすくするためのかんじき。2つに別れてスキーとして使えるスノーボードを使用する場合もある。

て固めた雪をなげジャンプのイメージを固める。ここまでの行程で実際のジャンプが出来そうだと判断できたら実際のジャンプを行う。最初の試し飛びといわれる行為は話し合いや、もしくはジャンケンで決められる場合もある。プロのスノーボーダーでも自らの技術の限界に近い状態で20～30メートルの距離をジャンプするため、失敗をした時の怪我などは常に頭の中にある。スノーボーダー達の間ではこうした状況で最初に飛ぶものや失敗の危険のある技にチャレンジしていく姿勢を「攻める」という表現などを使って尊重、リスペクトしている。

試し飛びをそれぞれ行い問題がない場合は撮影が本格化してくる。カメラマンはジャンプ台制作の最中に回りを歩き一番適した撮影アングルを探し三脚とカメラなどを設置して撮影の準備にはいる⁴¹。

準備が整うとライダー達は順番に飛び始める。何回も繰り返し飛び、回数を増すごとに少しずつ技の難易度をあげていく⁴²。天候と時間の許すかぎりこの行程を繰り返し、それぞれのタイミングで休憩をとりながら撮影を進める。それぞれが満足のいくジャンプが出来た時点でジャンプをするのをやめることが多く。何回も失敗してチャレンジするものや、成功しても次に違う技をするもの、一回の成功や失敗でやめるものなどそれぞれのコンディションや個性が出てくる。

それぞれのジャンプが終わり、撮影の終了と判断したら制作したジャンプ台を取り壊す。そして下山する。その後夕食などを取りながら、行なった撮影の映像をチェックしてどの映像が作品に使えるかなどを話して一日の撮影が終わっていく。

市街地での撮影も基本的には同じ行程をたどるが市街地の方が楽な移動が出来るため、一日に数カ所での撮影を行う場合がある。また夜間にライトアップを行なったの撮影も可能であり、より建物や手すりなどの構造物の配置が複雑なため、ライダー達の発想は市街地での撮影においてはより豊かになり、さまざまな滑り方が試される。彼らはそういった発想も楽しみつつ撮影を行う。また市街地での撮影は近隣の住民や警察とのトラブルをまねくことがある。そのため市街地での表現行為の方がスノーボーダーの持つ対抗文化のメンタリティを浮き上がらせている。

4-6 スノーボーダーの階層的位

スノーボードの余暇活動における参加人口は1997年330万人を記録し、200

⁴¹ スキー場に到着した時点からカメラマンはすべての行程を撮影風景として録画している場合がほとんどである。

⁴² こうしたジャンプの行程はこうした撮影を行うレベルのライダー達は良く知っているので、あえてジャンプ台を作成した時に、まだ着地地点にスノーボードの痕跡がついていない最初の状態で難しい技を行い。1回で成功させるという難度を表現してそれを撮影することもよくある。

2の540万人のピークまで増加した。2003年から減少が始まり2010年の400万人から2011年に340万人そして2012年には230万人に減少し現在はこの規模で安定し、スノーボードで使用する金額は98年に1人平均8万9千100円であり、一人あたり年間で概ね5万円近くから8万円前後程で推移している⁴³。

国内全体のレジャー市場とスキー場収入は92年にピークを迎え、スケート・スキー・スノーボード用品と国内自動車販売のピークは91年になっている⁴⁴。

一部を除きほとんどのプロスノーボーダーはアルバイトを経験して自らの活動費にあてる経験を持つ。1985年からフリーターという言葉が普及し始め、90年代には定着してきており、夢追い型のフリーターも一部注目されていた。2003年には製造業の派遣規制緩和が行われている。

また多くのプロスノーボーダーは降雪の多い地方の地域に在住している。降雪の多い地方の地域では工場や農作物の収穫、建設業、漁業関係などで冬のシーズン以外での労働力を必要としているため、スノーボーダーがアルバイトをする環境は存在していた。

木村はプロスノーボーダーとしての活動が軌道に乗った時期はアルバイトや副業はしていなかったがアマチュア時代やスノーボーダーを引退後にアルバイトを経験している。スキー場のホテルの給仕や工場での派遣労働、大工や牡蠣の養殖業、竹切りなどを経験している。

中村は魚市場での卸や農業、山田は建築現場や冷凍アイスの荷おろし、運送会社の配送センターでの仕分け。佐藤は宅配ピザや警備員などスノーボーダーが経験するアルバイトの種類は多岐に渡り、1人で幾つかのアルバイトを経験している。スノーボードは用具を買う費用と自動車での移動、スキー場利用のためのリフト券の購入などで他のスポーツや芸能に比べ資金が多くかかる。スノーボードは一式で20万円前後となりスキー場利用のパスポートの年間使用料は6～8,9万円ほどかかる。移動による車のガソリン代などアルバイトで得た収入の殆どを活動に投入している。

4-6-1 プロスノーボーダーの働き方

プロスノーボーダーの多くはスポンサー料や映像作品を通じた収入⁴⁵以外にも収入

⁴³ 統計データについては、財団法人 余暇開発センター『レジャー白書'98』,1998、公益財団法人 日本生産性本部『レジャー白書2010』,2010、『レジャー白書2011』,2011、『レジャー白書2015』,2015を参照。またスノーボードの市場規模はスノーボード研究において重要な要素であるが、本研究ではスノーボードの経済的な市場規模を分析することを目的としていないので参考に留める。

⁴⁴ 自動車販売数について、経済産業省『自動車産業の現状について』,2013に依拠する。

⁴⁵ インターネットと動画サイトの普及によりDVD販売による直接収入の形態はほぼなくなっ

を得るために滑ること以外に多様な仕事を行なっている。コーチングや指導者などスノーボードに関わることからまたそれから離れたものまで行い、その業務が活動の一番の収入源となることもある。

木村とアメリカで練習を共にしたことのある村山はスキー場と契約し、そのスキー場のコース設計とプロデュースをおこない、自ら滑った映像を作り、動画サイトに掲載して宣伝と集客を行なっている。またスノーボードショップも経営し販売と若手ライダーの育成を行なっている。

木村と映像制作をともにした田中は降雪地域の市街地に自らの居酒屋を経営し、また山岳ガイドの資格をとり登山客を集客しガイドをおこなっている。また親族が農家を経営しているものは農家を営みながら活動を行なっている場合もある⁴⁶。この他にスポンサー企業の正社員として就職するものもいる。

新しい動向として日本オリンピック委員会が仲介しアスリートの企業就職の支援事業で一般企業へ就職するものもいる⁴⁷。

資格としてプロの継続は更新料と手続きを行えば出来るので現役を判断することはスノーボードにおいては難しい。木村は90年代後半から2000年代を現役のプロライダーとして活動して自らスポンサーに契約の継続をしないことを伝え現役を引退する。木村に何故スノーボードをやめたのか尋ねたところ、興味がなくなったからだということを書いていた。

5章 アウトドア体験ツアー創業から2014年まで

本章では木村がアウトドア体験ツアーを開始する経緯であるトランジションを記述する。加えて木村が自営業としてツアーを営む場においてフィールドワークで得た記録をもとに理論を通した視点によって地域的な背景を記述する。続けてスノーボードからツアーガイドへのトランジションと2014までの木村とのツアー運営における参与観察を通して見えたことを時系列に記述していく。

5-1 アウトドア体験ツアーのはじまり

木村のツアーは2010年に始まる。プロスノーボーダーであった木村が引退し、

ているといえる。

⁴⁶ 山本敦久『「横乗り文化」と変容するライフスタイル スノーボード文化の社会学的考察』, 成城・経済研究, 第202号, 2013において農民として働くプロスノーボーダーが新しいプロジェクトを起こして、自然を通したライフスタイルによってスノーボードの新しい対抗文化のあり方を考察している。

⁴⁷ <http://www.joc.or.jp/news/detail.html?id=7054> ,2016/01/21 アクセス、を参照

村でハンバーガー屋を営み木村のアマチュア時代から共にスノーボードをして付き合いのある大宮の協力を得て開業する。最初に大宮が湖でカヤックを使ったレンタル業を考案し営業を行っていた。しかし客足はほとんどなくそれを見た山口が自分の発想を重ねてアウトドア体験ツアーの形にしていった。そして大宮は自身のハンバーガー店に専念することになる。

木村は資金をなるべくかけないようにするため、カヤックの調達はカヤックメーカーからブログでカヤックの紹介記事を書くことなどを条件に無料で提供してもらう。

そこから湖で他のツアー業者とコースなどが重ならない場所を探し、現在のスタート地点のちょうど対岸にあるポイントにスタート場所を設定する。創業初年度は村の大宮が営むハンバーガー屋のスペースを借りカヤックを置いて看板を立て、開業にあわせて村のペンションや道の駅などにチラシを配り置いてもらった。予約が入るとその時間に合わせ車にカヤックを乗せ湖のスタート地点に移動してカヤックを降ろしスタート地点に配置する。そこでツアー参加者と合流して出発するという形をとった。同時にホームページでツアーの案内と予約の受付をして、ブログで情報を発信するようになる。

開業初年度の問題として他の業者との関係があったようである。ツアーは開業前、Aなどの同業になる業者に挨拶に行ったということだが、操業を初めてからDの社長がクレームを入れてきた。それはスタート地点で操業することに関して許可をとっているのかという内容だった。スタート地点の土地所有者が学校法人であったため、木村は手紙を通してのやりとりで学校法人から許可をとり、その証明をDに持っていったという。それ以来そういったことは今のところ起きていない。

5-1-1 湖について

ツアーが行われるその湖は四方を山に囲まれており、その斜面がそのまま湖底に繋がっているような形状になっている。標高が高いことと、山の雪解け水が湧いている構造のため、湖にはほとんど川が流れ込んでいない。その湧き水のため水質が大変よい。

湖はモーターのついた乗り物が禁止になっているので静かなことも一つの特徴となっている。

野鳥、昆虫、魚が豊富におり、周辺を山に囲まれているため狐、クマ、蛇、多くの動物がいる。あまり知られていないが青木湖にはなぜかうなぎが自生している。何回か捕獲しようとして一度捕まえたことがあるがとても大きく灰色をしており、腹が金色に光っていた。

湖には発電施設が隣接し水の組み上げが行われ水位が上下動する。かつて湖の底が見えた時には水晶があったという話がある。秋口から水位が下がり冬には湖が全面凍る年

もある。

5-1-2 町と村

木村がツアーを行なっている湖を挟む町と村はそれぞれに特徴をもっている。町は主要駅の周りから中心地が始まり、横を走る幹線道路沿いに駅の前後に飲食店や大型のスーパー、パチンコ店、電気屋、またファミリーレストラン、チェーン系の小飲食店、学習塾、コンビニが数メートルから数十、数百メートル単位で並んでいる。また時折個人の商店も見え、木村たちはよくこれらのうち、台湾人の経営する中華料理のチェーン店で夕食を取り、店員とも顔なじみになっている。

中心地から離れた場所に温泉地がある。例えば地元のある女性は車を使い中心地寄りのスーパーと温泉施設の2カ所で働いていると述べていた。

1つの大きな工場と工場跡地が町に存在する。ダム工事やその2つの大きな工場が存在した1960年台に人口はピークとなり以後現在まで減少を続けている。90年台になくなったその工場の跡地は一部が貸し出され、残りの敷地については利用の誘致が行われている。

町の活性化の1つとして芸術家などが集まり観光ルートの開拓やイベントを行なっている。またある大学は地域文化政策のプロジェクトを長年続けている。

モータリゼーションの発達、人口減少、郊外に立地する大規模商業施設などの理由から平成20年代初めに町の団体の代表たちが集まり町の中心市街地の生成プランも検討された形跡がある。

もう一つの村は有数のスキーリゾート地であり大きなスキー場がいくつか存在し⁴⁸、幹線道路も整備されており大都市からのアクセスもよく、スキー場の周りにはホテルや民宿、ペンションなどといった宿泊施設が数多く存在する⁴⁹。ログハウス作りの飲食店や家も目立ち地域全体としてヨーロッパ風の景観が整備されているようにも見受けられる。

各地から観光客が団体、個人を問わずに訪れ、近年オーストラリアを始め外国人観光客

⁴⁸ 呉羽正昭『日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容』, 日本生態学会誌, 49:269-275, 1999によると日本のスキー場新設数は1973年にピークを迎えている。また、例えば群馬県などでは関越自動車道の全通とともに宿泊施設数も増加している。またスキー場立地の歴史的経緯については、白坂, 著『本邦におけるスキー場の発達と立地および分布について: Recreation Geography 序説 (fulltext)』, 学芸地理 (29):18-40, 東京学芸大学地理学会, 1975を参照。

⁴⁹ 石井英也『我が国における民宿地域形成についての予察的考察』, 地学評論, 43-10, 1970によると、1960年代に大都市周辺地域のスキー場立地地域において宿泊施設の急激な増加がみられる。

が増加しているのも特徴的である。こちらの村にも温泉施設が複数存在する。

木村のツアーがある湖はこれらの地域に挟まれる形となっている。

5-2 2011年の活動

木村のアウトドア体験ツアーの2年目である2011年は町の駅寄りにある平屋型のアパートと車庫を借り、そこを拠点にする。車庫の中にカヤックや道具一式を収納して、そこから車の上部に予約に合わせた数のカヤックを積み青木湖まで移動する。

スタート地点にカヤックを降ろし、ツアー参加者と合流し、ツアーが終わるとまた車にカヤックを積み、アパートに戻る。カヤック、道具類を片付けて1日の営業を終えるという形をとっていた。

この年はまだ予約の数がそれほど多くはなかったので次の年に向けた拠点となる場所を探すロケハンのようなことをしており、地域の人と接触することもあった。この年は雷が多くツアーを中止することが何度かあった。

5-3 2012年の活動

3年目は拠点が現在の湖畔にある小屋に落ち着くことになる。この場所はもともと旧国道沿いの道の駅のような役割で自動販売機などが設置してある運転者用の休憩所だったようだ。木村はたまたまこの持ち主の大家と知り合いになり、挨拶を交わす顔見知りとなってその縁で借りることになったという。

この年から夏のシーズンに毎日安定してツアー参加客が集まるようになりお盆時期にピークが来るサイクルが出来あがる。この時期はまだスタート地点と拠点となる店舗である小屋が少し離れていた。そのためツアー参加者に一度店舗前に集合してもらい受付などを行う。その間にガイドが店舗側にあるカヤックを対岸のスタート地点に運搬して配置していた。

そして受付の終わった参加者にはそれぞれ自分たちの車に乗り、ガイドの車の先導についていくという形で陸上からスタート地点に移動する。そこからガイドの車に積んでおいたパドルやライフジャケットを身につけてもらい、カヤックに乗るという手順を踏んでいた。

ツアーが終了すると参加者はカヤックから降りて車にもどり、乗り終わったカヤックはまたガイドが拠点まで運搬した。この年から犬の飼い方の相談を多く受けるようになり、冬のトレッキングを含めて犬がメインとなる事業展開になる。

5-4 2013年の活動

4年目は天候にも恵まれ順調にツアー参加者は伸び前年を上回り600人を超える。繁忙期の客への対応も含めて効率的にツアーを行うためにスタート地点を現在の場所に変更した。

拠点裏にホームセンターから買ってきた単管と欄干を使って栈橋を設置する。加えて湖の浅瀬から持ってきた岩や石を使ってその周りを固める。その場所から試験的にスタートすることをシーズン後半に始める。

その試みは実際に上手くいく。コースの距離が伸びることになったがそれ以上のメリットがあり、そのままスタート地点を固定することになる。スタート地点の変更でツアー全体の流れが良くなり、犬を含めたツアー参加者全体をよりまとめやすくなった。それはガイドによるカヤック運搬の負担と狭い道路上での車移動による停車の誘導や装備の準備などスタート地点での煩雑な作業がなくなったことで時間的な余裕が生まれたメリットによると言える。また参加者と犬も両方について気持ち的な構えというものが作りやすい状況が生まれたと考えられる。ツアー参加者にリピーターが増え始める。参加者のブログを通しての口コミや、犬の飼い主のネットワーク経由でのリピーターが多いと木村は感じている。

5-5 2014年の活動

木村が犬の管理資格をとり、トレーナーとして犬関連の散歩イベントを行うなど活動が拡大する。また試験的に長野市内に犬の室内運動施設を開設する。現在は閉鎖して屋外で犬と関わる活動に集中している。

5年目は天候に恵まれず連日雨の日が続き気温が上がらなかったがツアー参加者は前年を上回り900人を超える。カヤックを一台増やし、店舗として使用できるように改装を施したコンテナを購入して拠点に設置する。この年の特徴として若いカップルや犬なしの家族連れが増えた。また研究者の大学の同級生が偶然家族連れで訪れるなど客層の広がりを実感する。重ねて現在までのツアー参加者が乗ってくる車を見ると高級車が多く、車に乗り湖に来てツアーに参加する遊びをする層というものが存在することが改めて確認できた。

5-5-1 冬の活動の新たな動き

2014年の木村のツアーでは冬のアクティビティを本格的に始めている。冬場に積雪のために通行止めとなっている湖沿いの林道を約1時間半から2時間をかけて散策し、途中で休憩としてドリンクとシュークリームを焼いて食べて帰って来るといった内容になっている。

このアクティビティではガイドとガイド犬が先導しツアー参加者とその飼い犬が後についていくという形をとっている。これによりトレッキングに馴れたガイドの犬からツアー参加者の飼い犬が様々な行動を学ぶという効果も狙っている。

このアクティビティに続いて2015年の冬に新たな試みとして犬語勉強会というサービスを始めている。内容は犬をつれて宿やペンションに泊まるお客さんに対してトレーナーが映像を使って犬の行動がどのようなことを訴えているのかを通訳し、共に勉強するという室内アクティビティになっている。

木村のツアーのコンセプトとして「人は人間界と自然界を分けて考えてしまうので普段はどうしても人間の感覚でワンコを見てしまうので犬の行動を理解するのは難しい。そこで犬語勉強会では犬の目線を皆さんに作っていただいて、その上で映像を見ながら犬の話している言葉を通訳していく。」という考えがある。犬語勉強会は1回の開催で約1時間4000円という設定になっている。

2015年はこれら冬のトレッキングと犬語勉強会のアクティビティを組み合わせたサービスもはじめた。

これら2つのアクティビティを行うには犬を泊めることのできる宿との連携が必要になる。そのため木村は本格的なシーズンが始まる前に以前から交流がありお互いの行き来がある村のペンションや宿のオーナーたちに集ってもらい企画の発表会を行った。ここで自らが編集した映像を使って犬語勉強会の内容を説明し3つの宿と連携してこのアクティビティを行うことが決まる。

5-6 シーズン前の準備と試行錯誤

木村のツアーではシーズン中の繁忙期以外に次のシーズンに向けた準備を行っている。その過程で遊びや環境整備の作業を通して新しいアクティビティのアイデアを具体化することを行っている。例えば新しく始めた犬語勉強会に関してのアイデアは実際のアクティビティが始まるだいぶ前からあり、2014年の夏シーズン中の後半の予約の少ない時期に試験的に具体化していった。

木村はその時期にツアーに参加していた犬の行動を観察し、その場で通訳してそれが実際に当てはまるかどうかを他のガイドと遊びをしていた。その遊びを飼い主に犬との関係の作り方を伝える方法として映像を組み合わせるという形に繋がる。

木村の犬との関係構築の方法はアメリカのドッグトレーナーのやり方を取り入れたところから始まる。

そこから独学とツアーでのアクティビティにおける多くの犬との実践を通して独自の関係づくりの方法を確立している。

創設期当初からそういった知見をもとにツアーの最中やツアー開始の前後に犬の飼い方の指導は行っていた。これは冬のアクティビティにおいても同様で、無料で行っていたため犬語勉強会を行うまでは犬との関係構築の方法を有料のサービスとして提供できていなかった。また有料化しても利用してもらう前にツアーの流れから無料での指導を行っていた。

また新しいアクティビティの準備以外にシーズンオフの期間にカヤックのツアーコースを見回り、安全確保を行うため湖岸沿いの折れかかった木の枝や蜂の巣などを取り除く作業をおこなう。スタート地点の整備に関しては水中から伸びるヨシ（水草）を除去し石による埋め立てを行っている。石は湖の底に落ちている両手で抱えられるくらいの大きい石を拾ってきて敷き詰める作業から始まった。二年分のシーズンオフを使いこの作業を行った。

そうした作業が3年目には駐車場や庭に使う8センチタイプの小石を1トン分購入してスタート地点の岸辺に敷き詰めるに至る。また2015年の夏シーズンに備えて木で作った階段を設置している。他には木材をくりぬいて犬の水飲み場所を作っている。

こうした作業は木村がかつてログビルダーという丸太を使って家を作る職人に弟子入りしてログハウス作りの経験を生かして作っている。これらの制作において木材をチェーンソーで使切る作業が特徴的に現れている。また廃材の丸太を切り、皮を剥ぎ、形を整えて湖に浮かべて乗ってみて、パドルを使って漕いで遊んでみるということもした。

こういった作業を遊びながら行うことも後にツアーでのアクティビティのアイデアにつながっている。

6章 アウトドア体験ツアーの活動内容

研究対象者木村が創業してから形を作ってきたアウトドア体験ツアーが現在どのように活動されているかを記述する。生活を含め、ツアー全体を通したガイドの活動をあたる年の一日の流れにそって参与観察で得た記録をもとに記述していく。

6-1 アウトドア体験ツアーの所在地

木村の営業しているアウトドア体験ツアーのある場所は5章で触れたが、日本有数のスキーリゾート地として存在する村と、登山道入り口とかつてアルミ精錬、紡績などの会社の大工場がかつて盛り上がった、いわゆる企業城下町と言われた町の間ほどの場所に位置している。旧国道に沿った湖の湖岸に隣接したちょっとした広場のついた小屋を借りて店舗にしている。

この小屋は新道が出来る前に幹線機能を果たしていた旧国道に、長距離移動の自動車

やトラックなどの商用車が休憩に立ち寄るための機能を果たしていた今で言う小さな道の駅が使われなくなったために、木村が大家からかりている場所である。以前は自動販売機が置いてあり、現在でも土を掘り返すと昔の缶ジュースについていたプルトップが沢山でてくる。

周辺は道路をはさみ斜め向かいにログハウス作りのラーメン屋があり道路沿いに湖をはさみ斜め向かいに2つの家がある。反対側の道路沿いには20メートルほど離れた所に別荘が立っている。また道路をはさみ向かい側にも家がたっているがどの家とも数十メートル単位ではなれている。

6-2 活動の概要

現在、夏に青木湖のコースを回るカヤック体験ツアーと冬にスノーシューを履いて湖畔を犬と一緒に散策するツアー、通年で犬の飼い方相談、またペンションと提携し、映像を使用した犬の飼い方指導を使って行っている。3名のガイド、木村、木村の妻、研究者で活動。木村は主にガイドと犬の飼い方相談、木村の妻は受付とガイドの補助、研究者はガイドを担当している。

6-3 メインとなるアウトドア体験ツアーの内容の例

ある年夏のカヤック体験ツアー

開催期間 7月5日から9月28日まで毎日開催。

時間 午前9：00スタート～10：30終了
正午12：00スタート～13：30終了
午後14：30スタート～16：00終了

料金 一人 4000円 小学生未満2000円
犬 1匹目無料 2匹目から1000円プラス

セット内容 パドル ライフベスト 水上喫茶での1ドリンク

冬のスノーシューでの湖畔散策ツアー

開催期間	12月下旬から3月上旬
時間	午前10:00スタート～12:00終了 午後のセッションは相談により。
料金	一人 4000円 小学生未満2000円 犬 1匹目無料 2匹目から1000円プラス
セット内容	スノーシュー ストック ホットドリンク おやつ

6-4 カヤック体験ツアーのコース

ベースと呼んでいる小屋の形をした店舗のすぐ裏側を降りた所にある、単管とアルミ板で作った小さな船着場を出発して対岸を目指す。対岸で休憩した後に折り返してスタート地点に戻る。1時間半でまわれる基本的なコースを設定している。各セッション時の天候と風向き、案内する自然物の状況など湖のコンディションにあわせてガイドが行き先を選んで先導していく。

6-5 ガイドから見たあるシーズンの1日の流れ

ガイド達からみた1日3回のツアーの行程を中心とした1日の生活を記述する。

6-6 朝の準備

ガイドは夏場の7月から9月のシーズン中、店舗の小屋で寝泊りをする。朝7時頃に起床して準備に入る。8時頃までに朝食、洗面、トイレと身支度を済ませる。水道とガスが通ってないため知り合いのペンションから汲んできた水を使って洗面。朝食はだいたい電気ポットで沸かしたお湯を使ったスープとパンを食べる。ガイドである木村の飼い犬の散歩をしつつ、トイレに湖から汲んできた水を補給して周囲の様子を確認する。ベースの入り口に貼ったネットを外しツアー参加者の車が入れるようにする。到着の早い参加者は8時前に来る場合が多々ある。

敷地内に今年から設置したコンテナの扉を開ける。コンテナは受付と登山用ロープを編んで作った犬の首輪などの売り場になっている。

予約表を見てその日の予約を確認する。ここでガイドが話し合い、午前、午後、夕方各セッションにガイドが二人でいくか、どちらか片方がいくかを話し合う。主に犬の数と大きさによってガイドの構成が決まってくる。犬の扱いになれている山口が犬メイ

ンのセッションを担当することが多く、人間が多い場合は飯田が担当する場合が多い。しかし実際の構成はお客さんと犬をみて見ないと決めることができない。実際に客を見ないと得られない情報があるため、予約の客がそろってから状況を見て編成を変える場合が多くある。

6-6-1 ツアー開始前の行程

セッション前に、到着したツアー参加者と犬を見て着てもらふライフジャケットのサイズの見積もりをする。客自身がライフジャケットを持ってきている場合もあるのでそういった情報も含めて参加者とコミュニケーションをとる。このコミュニケーションの中で参加者の感じ、そして犬の気性や飼い主との関係をあわせて観る。

ここまでの流れで特に注意する点は参加者がこちらに到着して車から降りた時から
の雰囲気である。例えばここで犬が興奮している状態のままだとツアーに出発した後も犬は興奮した状態が収まらずカヤックの上で吠えつづけたり、湖に勝手に飛び込んだり、ガイドと飼い主のコントロールの効かない状態になってしまう。犬自体もカヤックという乗り物をそうした興奮して乗るものとして学習することがある。そういったことを防ぐために犬の状態をよく観察し、興奮していたりする場合は犬を落ち着かせることをガイドの側から飼い主へ提案していく。

犬は自分の名前を呼ばれると飼い主の方に注意を向け興奮する習性があるので、飼い主にツアー中犬が落ち着くまで名前を呼ばないことを求めたりする。また少し犬と散歩をしながら興奮したら体に対して素早く軽い手刀の突きをするようにして合図を送り、注意を促し犬と飼い主の関係性を一時的に改善するというを行う時がある。こうしたやりとりも飼い主との会話と状況を見た上で最適なものを探りながら行う。犬によっては飼い主やガイドに噛み付くような犬がくることもあるため、犬の大きさや興奮の度合いはツアーの成否に大きく関わるので特に注意を払っている。

カヤックは、漕いだパドルが体の上に来た時にしたたり落ちる水とカヤックの底に開いている浮力の調整用の穴から水が入ってくる。そのため上半身、下半身共に濡れる。予約の段階でそのことは伝えてあるのでツアー参加者はそれぞれ用意した水着などに着替える。着替える場所は受付のコンテナ内に設置してある。

こうしてツアー開始が近づき、各セッションの15分前に受付を始める。この時までにはガイドはライフジャケットや日差しよけの帽子、タイツ、ウェットスーツ、水着、携帯電話、防水カメラなどを身につけ準備を終えている。受付けでノートに代表者の名前と住所と犬の名前を書いてもらう。もう一つ事故等についての誓約書にもサインをしてもらい、保険料を含めた料金を徴収する。

6-6-2 ツアーの開始からカヤックに乗るまで

1セッション、つまりツアー1回の行程で家族連れや友人同士など別々の参加者が何組かの単位で集まることが多いので、受付が済んだ参加者からライフジャケットを着てもらおう。全員がライフジャケットを着終わった時点でそれぞれの車の中に貴重品などをいれてもらおう。車の鍵くらいを残してツアー中に貴重品や濡れて困るものは身につけないようにしてもらおう。最後に車の鍵をそれぞれの参加者から集めて、あらかじめ用意してある防水バックにまとめてその鍵などを入れツアーのさいにガイドと一緒に持っていく。

ここまで出来たら次に参加者に小屋の裏手に移動してもらい、そこからカヤックに乗ることになるのだが、その前にパドルと呼ばれる水を漕いでカヤックを進めるものを一つずつ渡していく。小学生以下の子供がいる場合は家族と本人と相談してパドルなしでいくか、パドルを半分にしたものをもっていくかなどを決める。パドルはカーボン製とアルミ製があるのだが、2人以上でカヤックに乗る場合はなるべく力のある人に軽くて強いカーボン製を渡す。

全員にパドルが行き渡ったところで人数が多い場合は、どの家族、参加者がどの種類のカヤックに乗るかをガイドが確認する。ツアーが用意しているカヤックはいくつか種類があり、あらかじめツアー参加者がのるカヤックは大まかに割当が決められているが、出発時の状況によってツアー参加者が乗るカヤックを話あいながら決めていく。例えばカヤックの数に余裕がある場合は一人で乗りたい客や希望の組み合わせを聞き、なるべく希望に応えるようにする。カヤックは全部で主にガイドが乗る一人乗りが2隻、二人乗りが2隻、3人乗りが3隻、また釣用としても使えるタイプの一人乗りが2隻、少し大型の3人乗りが1隻、もう1隻予備で一人乗りがあり、全部で11隻ある。このカヤックはここ2年ほど少しずつ数を増やしている。数を増やし多分1度のツアーで参加できる人数が増えたために繁忙期にツアー参加を断ることが減り、犬の乗る余裕や乗船者の組み合わせに余裕ができた。しかし一方でガイドは基本的に2人なのでガイドへの負担はましている。そのためさらにツアーの作業の効率化の為の改善の工夫がうまれるという側面もある。

最後にカヤックに乗り込む前に簡単なパドルのこぎ方を全員集まった状態で行う。このパドルのこぎ方を全員ですることによって一体感がうまれることと、ガイドの話すことに客が注意を向けるという行為でガイドの統制が効きやすくなるという狙いもある。客の中に子供が多い場合は水遊び用のボールなどのおもちゃも用意する場合もある。

これらのカヤックに乗る前の準備が一通り終わったら、次にベース小屋の後ろに位置

する木で作った階段を下り、一組ずつ棧橋に降りてもらおう。足元に注意しつつ、階段周りの雑草が伸びている場合には蛇などにも気をつけ客を誘導する。

6-6-3 カヤックへの乗船

棧橋まで誘導したらカヤックを棧橋に横付けして一人ずつ乗せていく。この時もツアー参加者が連れてきた犬がいる場合は注意する。ガイドの間では犬をカヤックに乗せる時に一番注意を傾けることを共有している。興奮して犬が自分の勢いで乗りそうな時はガイドが犬を静止してガイド側の統制に犬を置くようにする。ここで一旦犬を落ち着いた状態にしてガイドの誘導で犬が乗るようにする。この場合特に小さい犬など飼い主が興奮した状態でもそのまま乗せることがあるがなるべくさけるように努力する。しかし飼い主の立場からすると自分の犬のことは自分が一番よくわかっているという気持ちもあり、またガイドが知らない情報もあるので飼い主との短い時間の中でやりとりのさじ加減が必要になる。逆にナーバスな犬、臆病な犬の場合はある意味、よりデリケートな対応が必要になり、時間をかけて乗せる場合がある。自分から乗りたがらない犬は無理やりに乗せず、カヤックを目の前に慣れさせて、自分から乗るように少しずつ仕向けるこの場合犬のリードなども利用して誘導する。片足ずつ乗せたりしていけそうな雰囲気を感じて犬が一気に乗れるタイミングを見計らって乗せることが多い。

1セッション、一回のツアーでの参加人数が多い場合、乗せ終わったカヤックから目の前の湖上で待機してもらいように促す。この時の風向きや波の高さでカヤックの向きや位置なども指示する。

6-6-4 湖での行程前半

ガイド二人での乗船補助にメドがつくと引き続き片方のガイドは参加者をカヤックに載せつつ、もう片方のガイドは自分のカヤックに乗り込み先に湖に出て、先に待機している参加者のカヤックを統制する。この際に参加者に先に伝えたこぎ方を確認して実際に漕いで軽い練習を行う。

参加者のカヤックが全部湖に出て、最後にガイドのカヤックが出る。全員がカヤックで進める状態が整った時点で実際のツアー内のコースを回り出す。参加人数が多いところまでで棧橋から参加者をカヤックに乗せ始めて15分以上かかる場合もある。特にピーク時期のお盆は時間がかかることが多い。

参加者が多い場合はガイドのカヤックが常に先頭に出て参加者を先導する。湖に出て最初は大抵の場合、出発した時、前方に見える岬を目指し、沖あいを直進する。岬に近づく間にガイドは各参加者のパドルのこぎ方をチェックしてコツを伝えていく。

岬に近づくと天気などを見てカメラを持ったガイドが参加者の写真を撮ることが多い。ツアーの流れを崩さないため、カメラを持っていないガイドは引き続き撮影の終わった参加者のカヤックを止めないように誘導していく。写真の撮影はツアーの流れを見つつコース内のいくつかのポイントでガイドが適時に行っている。

岬を過ぎると今度は湖の半円状の地形にそって2つの湾度を岸伝にゆっくり進むことが多い。参加者の様子を見て湖についての案内などを混ぜつつ2つ目の湾度が近づく。この時点でツアー前に興奮していた大型犬などがいた場合はあまり岸に近づきすぎないように気をつける。犬がまだカヤックに対してなれていないことと、興奮がおさまっていないために岸に向かって上陸するおそれがある。

2つ目の湾度のちょうど真ん中あたりの岸辺にガイドがターザンジャンプと呼んでいるポイントがある。ターザンジャンプはガイドが岸辺の木に登って木の枝にロープをくくりつけてぶらさげた木のブランコで、ちょうど良い木と岸から急に深くなってブランコから湖に飛び込むのにちょうどいい場所を選んで設置した。家族連れで子供のいる参加者がいる場合、このターザンジャンプで遊ぶことがある。参加者の希望をきいて気温が高位場合に行う。ブランコで勢いをつけて湖に飛び込む遊びなのでツアーの前半で行うか後半に行うかは水雨と参加者と湖のコンディションに合わせて決める。

2つ目の湾度の真ん中を過ぎてから後半にかけて、くるみの木や水面近くに大量に小魚が群れているポイントがある。ここを案内することでカヤックの流れを一旦止める。ここから岸から伸びた木の枝が水面につくことでできた木のトンネルを潜る。その準備のため最初に指導したカヤックのこぎ方の確認と新たに小回りのやり方などを参加者に伝え軽く練習をする。

この2つの湾度は他のアウトドア体験ツアーをやっている他の業者もコースとして利用している。お盆の時期はそういった他のツアー客一行との接触や岸からの釣り客との接触を避けることに特別な注意を払う。

木のトンネルには一列に隊列を組み、前後がぶつからないように一隻ずつ入り口に入っていく。岸のうねりに沿って木の枝を避けつつ進んで出口をでる。そうするとスタート地点から見て湖のもう一方の端の対岸が見える。

沖あいを少し進みここで一旦、列になった参加者に止まって集合をしてもらう。ここでガイドが参加者からドリンク休憩の注文をとる。コーヒー、紅茶、オレンジ、りんごの4つの中から欲しいものを聞いて携帯電話で注文する。注文が撮り終わったら対岸に栈橋があるのでそこまでまっすぐ一気にパドルを漕いですすむことを促す。

栈橋が近づくと岸の上にある喫茶店のマスターが注文した飲み物をもって木の階段を降りてくる。カヤックを栈橋に順番に横付けしてマスターから飲み物を受け取る。参

加者はあらかじめ持っているチケットを渡す。

飲み物を受け取った参加者から岸伝にある木陰のポイントにガイドは誘導する。そこにある木の枝から垂れているロープとカヤックをつなげて休憩を10分ほどとる。この休憩中に参加者の様子をみて犬の飼い方、カヤックの乗せ方についての話と実演をすることがある。ツアー参加者がガイドの話に中を向けている時にツアーの自然な雰囲気を書真に収める。去年はツアー全体の様子を小型のカメラを使って動画で撮影することも試みる。

6-6-5 湖での行程後半

休憩が終わるとカヤックからロープをはずしツアーの後半を始める。後半は自然観察を中心に岸伝にすすむ。最初によく同じ木に川鶉がとまっているのでその場所をおしえ続いて岸伝に立っている木の中にキツツキが空けた穴が空いているものがある。毎年1つずつ増えて3つ縦に穴が空いている。そこを通りすぎると天然の鯉とヘラブナがたくさん群れをなしているポイントに近づく。晴天で波がいと光が湖面の中に差し込み魚が見えやすくするのでガイドはカヤックを立ててこぎながら鯉とへらぶなの群れを探し、参加者に見える場所を伝える。そのポイントをすぎると次に浅瀬に近づく。そこで参加者にパドルを湖底に差し込んでもらい、地面をつついてもらう。そうすると湖底の土から湧き水と一緒に泡が出てくる。湧き水を体験したあと、また岸伝に進むと前半に通った木のトンネルの出口のある岬のあるポイントに近づく。ここで希望を聞き子供にカヤックから湖の中に飛びこみをしたりする場合がある。

このポイントには帰りの木のトンネルの入り口があり、行きよりも長い設定になっている。そのトンネルをまた一隻ずつ列になりくぐり抜けていく。出口からでたところで湖が穏やかで時間に余裕のある場合はここから沖合に出て青木湖の中心あたりまで行く。沖合に参加者が集まったところで集合写真をとってツアーの一体感を感じてもらおう。写真を撮り終わったらスタート地点に向けてまっすぐ進んでいく。

スタート地点が近くなったところで犬連れの参加者に犬を泳がせたいかの希望を聞き、希望があった場合は「マリリンゲーム」と呼んでいるゲームを行う。水に慣れていてよく泳ぐ犬は様子をみて飼い主に任せて自由に泳がせることもある。このゲームの名前は映画にちなんでつけている。

ゲームの内容はガイドのカヤックから飼い主のカヤックまで犬を泳がせるという内容になっている。飼い主のカヤックから犬を預かりガイドのカヤックに犬を乗せ、飼い主のカヤックから離れる。離れたところで犬のライフジャケットの締め具合をチェックしてリードがついている場合ははずす。それから犬を持ち上げ犬を水面近くまで運ぶ。

ここで犬が水をかくような仕草をしたら水に入れる。ガイドは水に入れる瞬間に飼い主に犬の名前を呼ぶように促す。犬が飼い主のカヤックまで泳いだら引き上げてもらう。また犬の習性から水から上がった犬が体に染みこんだ水をブルブルふるい落とす仕草をするのでその仕草を確認して犬をなでたりすることも指導する。これは人間の赤ん坊が生まれた時に泣くのと一緒のようなものでこのブルブルの習性がでないと犬は水に対してなんらかの恐怖心や苦手意識のようなものを持ったと考えられる。このゲームを使って今まで泳いだことのない犬の初泳ぎも行っている。

6-7 ツアーの終了

マリリンゲームを終えると参加者にすぐ目の前にあるスタート地点の栈橋に向かってもらう。ガイドが先にカヤックから降りて、一隻ずつカヤックを手で押さえ、参加者が栈橋に降りるのを補助する。カヤックは乗り終わると上半身がパドルを漕ぐことで疲れるが、それ以上に下半身、特に足に力が入りにくくなっている。そのためカヤックから降りる時は特に注意するように参加者に伝える。またガイドは参加者が倒れないように注意を払い補助をする。特に高齢者はフラフラになることが多い。

参加者がカヤックからおりたところでツアーは終了となり参加者はそれぞれライフジャケットとパドルを戻し休憩で使った紙コップなどをすてて着替えに戻る。ここまではちょうど1時間半から2時間くらいになる。

ガイドは参加者が使ったカヤックを湖の水で洗いながして次の時間のツアーに合わせてカヤックをロープで栈橋につないでおく。

6-8 朝のツアー終了後の行程

朝のツアーが終わると今年は雨が多く気温が上がらないことが多かったのでいったん濡れた水着などを着替える。そして小屋の中で昼食を済ませる。昼食はレトルト食品とご飯の組みあわせが多い。昼食が終わると少し休憩してから次のセッションの準備に入る。またツアー参加者の様子を確認して午前のセッションと同じ流れに入っていく。昼のセッションが終わり最後のセッションは時間の空きが少ないためすぐに準備にとりかかることが多い。

一日3回の最後のセッションが終わると。カヤックを全て岸にあげ道具一式を片付け、その日のツアーは終了になる。夕食が外食にしない場合は午後2時半から行われる最後のツアー中に木村の妻によって夕食の買い出しが行われる。大体18時くらいから小屋の脇でホットプレーを使い、買ってきた食材を焼いて夕食を食べる。夕食が終わると村の温泉に移動して入浴をする。時間が遅くなってしまった場合は町の入浴施設に行く場

合もある。そしてだいたい20時から21時に戻り翌日の予約の確認、ブログ、その日のツアーで撮った写真をツアー参加者がダウンロードできるようにサイトにアップする作業を行い22時から23時頃に一日の作業は終了する。それから各々就寝する。

この行程を常にツアーを運営する3人で話あい作っている。フィールドワーク最終年には7月と8月のほぼ全日でこの行程を繰り返した。

7章 周囲との繋がり

本章では木村のアウトドア体験ツアーでのキャリア形成を通じて起きた周囲との関係性について記述していく。

7-1 ある年の湖周辺の同業者との関係

青木湖には木村の営むツアーと似た業態として経営するAライオン、B、青木湖アドベンチャークラブ、D、Cといった業者が湖畔に拠点を置いてカヤックやボムボートやカヌーなどを使いアウトドア体験ツアーやレンタルサービスを提供している。

木村のツアーは立場としてこの湖で一番の新参者である。上にあげた業者の中で地元の出身者が経営しているのはBのみで他はいわば外から来たものという形になっている。

他に去年から木村のツアーと同じくらいの小さい規模でカヌーやサップというサーフボードにいた板を貸し出す所が木村のツアーベースのあるすぐ近くの旧国道沿いに出来ている。そこはスキーヤー向けのペンションが始めたらしく一度木村のツアーに挨拶にきて、それからお互いに近所付き合いが続いている。

この中でアウトドア体験ツアーを一番大きい規模で行っているのがAで学校などの団体客を多く入れている。ここは家族で経営されている。次に大きい規模で行っているのがCである。Cはカナダ人が経営している。そのためスタッフと客層に外国人が多い。おそらく同じく湖畔にあるホテルがキャンプ場など場所を貸す形で協同しているという話を聞く。

これら他の競合と木村の関係は概ね問題なくやって共存しているという印象である。Cとは湖上で挨拶を交すことや、軽い会話もするフランクな感じがある。一方Aは挨拶をかわすがツアーの規模が大きいので事故の危険性もありなるべくお互いに接触はさけるようにしている雰囲気がある。従業員の態度はあまりよくないように見える。主にシーズン中頻繁に湖上に出ているのはこの2つのツアーなので木村のツアーと多少の接触がある。Aの経営者の息子や他のツアーのスタッフの中にスノーボーダーがいるため、木村の名前は通っており、木村に対して好意的な者も多い。木村のツアーが犬をの

せて行うアクティビティをメインで行っているため、よく他のツアーから珍しがられ、案内の対象にされることが多々ある。

Bは地元出身の経営者の客に対する態度の厳しさが有名であり、Bに無断で近づいた者を猟銃で追い払うなどの逸話を聞く。おそらくよそ者に対しての敵対心からか他の業者に対して厳しい対応をするように聞いているため近づかないようにしているのだろうと考えている。

特にBの地理的に隣に位置しているEの社長と関係が上手く言っていないという話を聞く。Eはスキー場も持っているのだが社長がホテルとスキー場を前の経営者から買い取ってからスキー場を閉鎖させてしまったため、地元の人からよく思われていないと聞く。

また金銭面でも支払いが良くないという話もあり、Eは周囲との関係が良くないという話がある。外国人のスタッフを雇い、子供向けの英語キャンプなどを行っている。Eはおそらくバブル期に作られた大きなレジャー施設を持っており、現在はそうした施設もホテル以外には稼働していないためその利用に苦慮していた。

一度木村のツアーに社長が顔を出しに来たことがあり、それいらい交流がある。その時に施設の活用について色々相談され、何か一緒にできないか話をしたが、それについては現在話をすすめていない。その話の際にEと関係しているイベント会社の社長に案内され総合施設内を見学。室内プールや売店、食堂、フィットネススペースなどかなり広く、また豪華なつくりになっていた。椅子や机貸しスキーの類など最後に使われたままで置かれていた印象だった。

7-1-1 喫茶店との関係

木村のツアーが位置する対岸に喫茶店がある。ツアーで行う休憩のさいに使う飲み物を出してもらっている。木村はカラマツから前払いのチケットを買う形でその飲み物代を清算している。喫茶店のマスターも地元の間人ではなく湖に移り住んだため、そうした視点から木村は湖についての情報も提供してもらっている。

また、木村のツアーのある小屋から道を挟んだ斜め向かいにはラーメン屋があり直接商売上のつながりはないが近所付き合いがある湖で20年ほど経営しており夕食を食べにしばしば行く。店主は女性で娘と2人で切り盛りをしている。

スキー場近くのペンションのオーナーからは洗面用などの水を提供してもらっている。オーナーが犬を飼っているため犬を通じた交流がある。お互いの場所への行き来がある。

7-1-2 村の宿泊施設との関係

湖のすぐ近くの村のある地域では犬OKのペンションなどがありそれらのペンションからのツアー参加者も多い。創業初年度からチラシを配布しており関係がある。ペンション1が中心となって犬マップという犬連れの観光客向けのマップ製作に協力している。こういったペンションはスキーシーズンの冬に客の入りが逆に減るということで冬シーズンを盛り上げたいために協力を頼まれている。今シーズンからペンション2とトレッキングの新しいイベントを企画している。

また、あるホテルからのツアー参加者が増えた。ホテル側から社長が視察に訪れツアーを実際に体験したことがある。木村の話によると取り巻きを数名連れ、かなり横柄な態度であったという。そこで社長たちにターザンジャンプを通常の倍近い高さで飛ばせて、こちらのテリトリーなりの態度を示した。ホテル側は何か協業の意図があったらしいがその後の進展はない。木村のツアーが小さいながら湖の中で現在までは順調に客を増やしていることによって、地元の間人が覗きに来ることや、他の業者が繋がりを求めてくるが増えてきている。

7-1-3 ハンバーガー屋大宮との関係

ハンバーガー屋の大宮が飼い犬を連れよく遊びにくる。こちらのツアーに午前中参加した客が午後村を回るさいにハンバーガー屋に行くことがある。逆にハンバーガー屋でこちらの話を聞きツアーに参加をしにくる客もいる。

またこの地域一帯をアウトドアの遊びを通して紹介するサイトの運営者との個人的な交流がある。アウトドアを通して地域を盛り上げたいという運営者の思いからサイトに木村のツアーが紹介されている。ツアーの仕事を手伝ってもらったことがある。

7-2 犬を通じた繋がり

湖でのツアーガイドの活動のメインには犬が関わる。客の中にも犬関係の仕事をしているものが訪れる場合があり、そこから新しい繋がりが出来ている。

2013年シーズン頃から一番ツアーを利用している参加者に犬競技のトレーナーをしている者がいる。自身の飼っている犬の泳ぎや関係づくりを競技の訓練とは違った方法を持つ木村から学んでいる。

また山岳救助犬の訓練をしているトレーナーがしばしば訪れる。一度木村の仕事を手伝っている。

地域外からは警察犬の訓練の成果を競う競技で優勝して一般の飼い犬指導に転身したというトレーナーが来る。警察犬の訓練とペットしての犬のしつけではかなりの違い

があり、悩んでいる時に木村の名前を知りツアーにやってきたという。

ハンバーガー屋の大宮も犬を2頭飼っており、川で犬同士を遊ばせる飼い主の交流会に参加をしている。こうした関係から木村も交流会に参加をし、またその交流会の主催者と参加者が湖を訪れる。

木村と協働する村のペンションでは近隣のスキー場を含めて犬を連れて旅行にくる客を増やそうという取り組みをしている。犬の集まり会という催しや、冬のスキー場で犬の運動会を開催している。このイベントではツアー参加者と木村との再会があった。

7-3 スノーボーダーの繋がり

木村は現役時代、海外での活動と日本全国を移動して活動をしていが、村を中心に活動をするスノーボーダーとの繋がりも強かった。村の地域はスキー場が多くプロスノーボーダーが地域外から移住することや地元出身のプロスノーボーダーが多く住む地域といえる。

そのため湖でのツアーガイドを始めてからも過去の繋がりからスノーボーダーが湖を訪れることがある。

木村自身は特に引退したことを公にせず湖での活動もそうした繋がりには知らせることや宣伝することは行っていなかった。ハンバーガー屋の大宮はもともと別地域の出身であった。

大宮は木村より先にスノーボードの活動から離れ、関西圏でスケートボードのショップ経営を経てから村にハンバーガー店を開いた。

2012年はプロスノーボーダーの村山が訪れた。村山はツアーの様子を動画撮影し、自らが営む動画投稿サイトのチャンネルで紹介した。

2014年シーズンは木村が長年出演していたスノーボードビデオの元カメラマンが家族を引き連れて訪れ、久しぶりの再会に旧交をあたためた。彼はスケートボードパーク管理の仕事をしているとのことだった。

また同じ年にはスノーボードのプロ資格の認定が始まった頃にプロとなった宮田が訪れた。当時宮田はスキー場のコースデザインなどを行っていた。宮田は夫婦で訪れ自身の飼い犬についての話やサップカヤックを使ったビジネスについて木村と語り合っていた。

7-4 新しい関係性

木村のツアーの拠点が存在する小屋から見て湖を挟んだ斜め向かいのスキー場にペンション3のオーナーがいる。彼は木村がツアーを始める少し前から首都圏のファース

トフードチェーンの正社員を早期退職して、この場所に移り住みペンションを経営している。

そのオーナーも犬を飼っており、木村との交流が始まっている。毎年夏のシーズに自らの犬を連れ、ツアー参加者の客として木村のところを訪れている。

木村も小屋での生活で使用する水を貰いにいき、人手が足りない時はペンションを手伝っている。冬にはペンションの雪かきを手伝い、その代わりに木村は夏に使ったカヤックをペンションの倉庫に置くという協力関係が出来ている。

また村でアウトドア商品店を営む店長との繋がりが生まれている。店長もこの地域の出身ではなく木村よりもあとに村へ移住してきた。店長は首都圏などで行われるフリーマーケットなどに出向き自らの商品を販売しているが、木村はその手伝いをしている。

店長はツアーで使っているカヤックのうちの1つを木村に貸している。またツアーの拠点である小屋の敷地内で使っているテントなども木村に提供している。

結論

8章 分析と考察

本章ではフィールドワークを通して得た木村のスノーボーダーとアウトドア体験ツアーのガイドとしての2つのキャリアの記録をもとに共通して見えるものを分析していく。

8-1 ポスト工業化社会と木村の再帰的關係

木村のキャリア形成を通して本研究で見えてくるものとして木村のキャリア形成に対し、ポスト工業化社会の枠組みがどのように圧力として影響しているのかということ、また逆にその枠組によって広がった別の選択肢の中から、自らの創造性を使って独自のキャリアを形成することによって再帰的に地域社会へ影響を及ぼしているという社会と木村を代表とするスノーボーダーの共存関係の実体が見えてきた。

木村は90年代前半に高校を卒業するさいに、自動車の大工場への就職という高校と企業との間で出来上がった学校という場からメンバーシップ型の雇用システムという場に入るか、もしくはストロー効果に代表されるように首都圏や大都市への進学というキャリア形成における選択肢の圧力が少なからずあったと考える。

しかし木村は第三の道、新しい活動の場として、アルバイトなどをしながら当時2000年代まで利用客が増え続け、既存の社会的枠組みにたいして対抗文化的な性質を持ち、当時ブームとなりつつあったスノーボードでのプロになるという選択肢を選んだ。

プロスノーボーダーとして一定のキャリアを形成していた木村はスノーボードの利

用者が減り、映像表現による収入形態がインターネットでの動画配信の普及によって大きく変化し、さらに多くのプロスノーボーダーが兼業者として活動を行っていた2000年代後半に引退をする。

引退した木村はスノーボーダーのネットワークによって長年付き合いしていた大宮の行っていたカヤックのレンタル業をスノーボードで培った創造性を利用して新たにアウトドア体験ツアーのガイドの仕事を始めた。こうしてキャリアにおける新しい場への移動を障害なく乗り越えることができているように見える。

また、このアウトドア体験ツアーを独力で始めることができた理由の1つとしてスノーボーダーとして個人で仕事をこなしていた事が寄与しているように見える。2つのキャリアとも個人事業主といえる業務形態での仕事である。こうして始めたツアーガイドの仕事は順調に成長していく。

その成長によって木村と喫茶店やペンション3のオーナーや店長またその店長とも繋がりをもつ村の大宮を中心とした自営業の互恵的なネットワークが構築されている。

こうしたネットワークには全員が湖や村の地域外からの移住者であり、新しい社会を形成するきっかけにはなっていないだろうか。

また木村のようなスノーボーダーが増えることによってそのネットワークが拡大しこれからのキャリア形成における社会的な枠組みに変化をもたらす可能性も推測する。

8-1-1 スノーボードでの技術向上とツアーガイドでの技術向上

さらに木村のスノーボーダーとツアーガイドとして2つの個人事業における創造性や仕事の作り方および仕事の方法を詳しく見ると、その2つに共通点が見られる。

その共通点とはスノーボードとツアーガイド、特に犬のしつけに対する技術向上のプロセス、いわゆる技術の上げ方が非常に類似している。これは木村がスノーボードで洗練した方法や経験が次のキャリア形成に生きているということが言えると考えられる。

具体的にその方法は遊びの基本的な構造と言える、「まねる」という行為による上達である⁵⁰。木村はスノーボードを初めてから技術を向上させるにあたり外国人スノーボーダーのビデオを繰り返し観て研究し、その動きをまねすることで技術の向上を図った。そして自分がそのまねた動きを出来るようになると、そこから木村は自分なりの動きを加えていくという事を行っていた。また自らの技術レベルが他に真似をする対象がいなくなるレベルに達すると、そこからは自らの想像力と工夫で新しい技を作り、技術の

⁵⁰ 『遊びの大辞典』によると「子どもの遊びは模倣から始まるといってよい」とある。

向上を図っていた。

こうした技術向上の方法の背景にはスノーボード全体において特定のコーチや指導者がほとんど存在していなかったこと、加えてスノーボードがスポーツとして比較的新しいために自らが新しい技術を開発する余地が多く存在しているということがあげられると考える。

そのため「真似をする→出来るようになる→自らの想像で工夫を加えていく」という技術向上のプロセスが蓄積されていったと考えられる⁵¹。

この経験はそのまま新しいツアーガイドの仕事づくりに活かされているといえる。木村はまず自らの興味から犬のしつけについてアメリカの著名なドッグトレーナーが犬の飼育方法に困った相談者の悩みを自らの実践で解決するという、シリーズ展開されている動画を徹底的に繰り返し見て研究し、その方法を実際のツアーガイドの場や犬の飼い主同士の交流の中で実践するというを行なっていた。そうして1000頭以上の犬との経験が積み重なるうちに自らの見解や工夫が加わり、木村独自の犬との関係構築の方法が確立していった。

このようなスノーボードで培った経験、つまり資本、リソースと言ったものを使い、木村は同業者にはない犬とツアーを共有できるという差別化を新しい事業で行うことができたと考える。

また個人事業主として木村がスノーボードでスポンサーを獲得し、シーズン終了にそのスポンサーと交渉を行うという経験はツアーガイドの事業を始める際にスポンサーとしてカヤックをメーカーから引き受ける行程につながっている。こうした木村のスノーボードという特殊な環境で伸ばされたと考える能力は想像力という形で活きているのではないだろうか。

8-2 スノーボードによって作られた想像力

ツアーガイドの営業が現在まで上手く言っている要因は社会的な側面から見た場合、ここ数年の国内観光の盛況ぶりや、ペットブーム、インターネットを利用した小商店の個別性による大店舗では行えないサービスの提供と言った点があげられるかもしれない。

しかし本研究ではこのツアーガイドの事業が上手くいっている要因の1つとして木

⁵¹ こうしたプロセスは剣術や能などの芸能での上達過程に見られる「守破離」と言ったような概念やイノベーションという考えと共通するものと言えるかもしれない。(著)世阿弥野(編)上豊一郎、西尾実『風姿花伝』、岩波文庫、1958、(著)柳生宗矩、渡辺一郎『兵法家伝書-付・新陰流兵法目録事』、岩波文庫、2003、より。

村がスノーボードで培った想像力があると考ええる。

そしてその想像力はスノーボードの特殊性がもたらしているとも考える。そのスノーボードの特殊性とは、つまり他の一般的なスポーツにはないルールを自らが作るという側面の存在、もしくはルールを破り、新しいルールを変更するという側面があるということである。

木村がスノーボーダーとして重点的に活動していたのは映像制作である。この映像制作の撮影現場ではルールは存在しない。遭難をしないことや命を落とさない、法律を守る⁵²といったようなルールは存在し得る。しかしそれ以外は自分の発想を使い、考え、どういった事ができるか取捨選択を行い、組み合わせる。

そして何ができ何ができないか、また何をしてはこの場所ではいけないかということを決めていく。これはどのように滑るかといった想像力の問題から仲間同士の技を見て自分はどのような技を行うか、また滑る順番などすべての事を決められた状態ではなく、自由な状態からルールを作っていく。

そうしたルールを設けることで自らは他のことを考える必要がなくルール内のことに集中することができる。そうしてスノーボードの技術が上がり、技術が上がると出来ることが増え、するとまた新たな発想が生まれる。そうした発想によってまた違うルールを作ることや、変更していくことが出来る。

そうなるか発想することが先にあるのかまたは技術の上達が先にあるのかではない、想像力の向上と技術の向上という再帰的なループが起きてくるのではないだろうか考える。

通常スキー場のゲレンデで滑るスノーボーダーはスキー場という枠内で安全のために決められたコースとルールの中で滑っている。

しかし普段からアラスカのスキー場のない山で滑っているスノーボーダーが同じゲレンデで滑ると今まで考えたことのないやり方でそのスキー場の中を滑り、それを見てそのスキー場で長年滑っている人間が驚くことがある⁵³。

こうした想像力の伸ばし方は他の競技スポーツではあまり見ることができない。このスノーボードがもつ特徴は絵をかくことや演劇や音楽など芸術表現に近いものがある。

これらの話は特別なことではなくごく当たり前のように思えるかもしれない。しかしそうした当たり前の力を伸ばす機会が社会的な枠組みによって疎外される場合もあるかもしれない。ポスト工業化社会によってそうした疎外が起きているかは今回の研究で

⁵² 市街地でのスノーボードはある意味社会的なルールに働きかけルールを変更しようとする動きとも受け取れる。

⁵³ スノーボーダーへの聞き取りより。

は証明することはできないが、仮説の1つとして可能性はあると考える。

8-2-1 スノーボーダーの自己目的的な性向

以上の本論とその分析からスノーボーダーの特性、特に木村のようなスノーボーダーのタイプとして1つの傾向が見えてくる。

主に心理学の領域で注目されているチクセントミハイ（2002）の提唱するフロー体験という現象がある。そのフロー体験に没入する人間の1つの特徴として自己目的的なパーソナリティが挙げられるという。木村はそうしたフロー体験に入りやすいパーソナリティを持つと言えるかもしれない。

以下においてフロー体験と自己目的的パーソナリティにおいて本研究と関連する概念を整理しておく。

8-2-2 最適経験

最初にフローの概念について、提唱者であるチクセントミハイの定義をまとめてみたい。創造的な人々は何をもってその人の人生を費やすに値すると考えるのか、富と名声が与えられなくてもその人が人生に意味と価値を与えると感じるものはなにかという疑問からフロー体験の研究が始まる（Csikszentmihalyi, 1990）。チクセントミハイらは最適経験という概念に注目し、経験の構成を1「感情」2「意志」3「認識による精神的操作である思考」という3つの意識で分類している（Csikszentmihalyi, 1998）。

感情は、もっとも主観的で最も客観的である。自らの真の感情は自らにしかわからない一方で、私達が見る外側の世界よりも現実的だからである。私たちは現象学者のように自分をみる一方で、外側の出来事や明確な行動よりも私たちの内面の感情を深刻に受け止める。感情は私達が良い選択をする助けになるという最も基本的な特徴をもつ。状況によって支配されるより、個人の資質によって影響されやすい一方、何をしているか、誰と一緒にいるか、どこにいるか、といった要素により多くの影響を受ける。

意志は短期的に精神的エネルギーを焦点に当てる。目標はより長期に精神的エネルギーの投資が必要である。私達が目指す目標は私達が何になるかを形作りそして決める。意志が目標に向けて精神的エネルギーを投資させて個性を創り出す。東洋の宗教は抑制により、心的エネルギーを個人にとって大事な目標に集中させることが目的であり強いモチベーションを生むと解釈している。修行者は遺伝的に組み込まれた欲求が意識に入り込むのを阻むためにかなりの注意を必要とする。

認識による精神的操作である思考について。感情は取り組むか、避けるかのモードに組織全体を動員することによって注意する方向に焦点をあわせる。それは我々が思考と

呼ぶものは精神的エネルギーが整えられるまでの過程でもある。目標は望まれる結果をイメージさせることによって注意に集中させる。思考は意味のある形で互いに関連した一連のイメージを創り出すことによってこれを実現する。深く思考するためには、注意力を集中する方法を学ぶ必要がある。集中が出来なければ、意識は混沌とした状態のままである。現状の感情やモチベーションに反して集中するためにはより多くの努力が必要となる。また、知的なタスクが困難であればあるほど、集中することも困難になる。ただ、行為の対象が個人の好むものであれば、またはそのことにモチベーションを持っていれば、それがどんなに難しいことであっても、苦もなく集中することができる。

そして日常の生活では感情、意志、思考のすべてが同時に機能して調和していることは稀であり、ほとんどの場合はこの3つの意識が互いに衝突し合っている。稀にこの「感情」「意志」「思考」3つが調和し我々の意識が完全に経験、行為の中に没入することがある。その状態を最適経験と呼んでいる。

最適経験は意識が深く集中しているので、その行為と無関係のことを考えあれこれ悩むことに注意を割かれることはなく、自己意識は消え、時間の感覚は歪められ、このような経験を生む活動は非常に喜びのあるものなので、人々はそれが困難で危険なものであっても、そこから得られる利益についてほとんど考えることがない。最適経験をする行為者は活動をそれ自体のために自ら進んでおこなう (Csikszentmihalyi, 2008)。

8-2-3 チクセントミハイらのフローの概念

チクセントミハイは最適経験の状態をフローと名づけ “目標に向かい、ルールがあり、自分が適切に振舞っているかどうかについての明確なフィードバックを与えてくれる行為の枠組みの中で、現在立ち向かっている課題に自分の能力が適合し、克服するスキルが獲得された時に生じる感覚”としている。最適経験の研究は当初、面接調査によるものが主なものであったが、フロー (Flow) という表現はその研究協力者であったロッククライマー、チェスプレイヤー、作曲家、ダンサー、バスケットボール選手、外科医など多くのエキスパートによってその最適経験の感覚が流れているような感じ、流れに乗っているとといった表現で語られることが多かったことに由来している。フローは明確な目標とそれに対する適切な反応が要求されるときに感じる傾向がありチェス、テニス、ポーカー等のゲームや、宗教儀式、音楽、コンピューター・プログラミング、登山、手術等はフローの状態に入りやすいことが示され、これらのような活動をフローアクティビティと呼んでいる。

そのフローを“人が行為に没頭している時に感じる包括的な感覚”とチクセントミハイは定義した。フロー状態に入ると、その時行なっていることが、“行為者の意識の仲

介が必要ないかのようにその人の内面の論理に従って次々に進んでいく。人はそれを瞬間から瞬間への統一的な流れとして経験し、その中で自分の行為を無意識に統制し、その状態では自我と環境、刺激と反応、過去現在未来との境はほとんどなくなる”として

いる。

例えば“ロッククライマーが岩登りに没頭しているとき、自分が自分であるという意識がなくなり、岩のなかに溶け込んでしまうような、あるいは自分と岩肌との境界がなくなってしまうような感覚に陥ることがある”という（浅川, 2009）。また芸術家が侵食を忘れ自分の作品制作に没頭している時の感覚や、チクセントミハイは自身の兄の例を出して“兄が数日前水晶を手に入れ、朝食が終わってすぐ自分の顕微鏡で観察を始めた。しばらくして鉱石の内部構造が見えにくくなっているのに気づき、太陽に雲がかかったのかと思って目を開けてみると、もう日が沈もうとしていた”（Martin E. P. Seligman, 小林裕子訳, 2004）。他に夕食で友人同士集まった時に話していた話題が盛り上がり、お互いが心地よい楽しい気分になっている時などをフロー体験の例として上げている。

“フローの状態にある人は完全に集中しており、雑念の入り込む余地がない。自己の意識は消えるがそれでいてはっきりとした気持ちを持っている。時間に対する感覚は歪み、時間がゆっくり過ぎるように感じる。フローの状態に入ったとき、その行為自体に価値が見出される。フローの状態にあるとき、我々は幸福を感じることをすらない。後から振り返ってそう感じるだけである。”（CSikszentmihily, 1990）

チクセントミハイは自身の発表でフロー体験に入る7つの条件を以下のように定義している。

1. 自分が行なっていることに完全に没頭、専念、集中している
2. 日常の現実を超えた忘我（エクスタシー）の感覚
3. 何をする必要があり、どうすれば上手くいくかわかっている内心の明快さ
4. 能力が課題に対して十分である、つまりその活動は行うことができると確信している
5. 自分自身に対して不安なく自我の境界をこえて深まる、落ち着きの感覚
6. 完全に現在に集中した、時間が一瞬ですごるように思える時間の喪失感
7. フローを生み出すものは何でもそれ自身が報酬になる本質的なモチベーションとなる。

さらにその定義に以下の7つの説明も加えている。

- ① 時間の経過とともに自分が何をしたいのかが分かっている
- ② 自分のことを忘れてしまう
- ③ 何をする必要があるのかが分かっている
- ④ それが難しくても可能である
- ⑤ 直ちにフィードバックが得られる
- ⑥ 時間の感覚が消失する
- ⑦ 自分はずっと大きな何かの一部である

チクセントミハイ（1990）は“条件さえ満たせば、ほとんどあらゆる活動がフローを生み出さう。したがって、上記のような条件が可能な限り満たされるように努力することで、日々の生活の質を向上させることが可能なのである。”と述べている。

そしてチクセントミハイはこれらのフロー体験の定義の中で、その活動から起こる楽しさなどが報酬となりその活動を行う動機となること、つまりその活動自体の目的となる自己目的的経験についてふれている。

8-2-4 自己目的的について

自分が行った行為に対する楽しさや、自身の成長にたいする喜びなどの内発的な報酬をともなう経験を自己目的的経験（Csikszentmihalyi, 1975）と表現している。それ自体を行うことが目的となった経験といえる。

人がフロー体験を伴う活動に多くの時間を費やし、その活動を何度も繰り返そうとする理由は、彼らにとってその活動から得られる経験自体が内発的な報酬となるからである。その活動をし続けること、楽しさを経験し続けることが目的となり、活動自体が自己目的的となる（Csikszentmihalyi, 1990）。つまり彼らが行う活動自体が目的になることである。

“外的・間接的な目標のためではなく、それ自体を楽しんで物事を行なっている人に対して、「autotelic」自己目的的という言葉を使う。人は、仕事、家族生活など環境との相互作用において、フローを経験しているのであり、外的な報酬には依存していないのだ（Csikszentmihalyi, 1990）”。このように自己目的的とは行為自体が喜びや楽しさなどの動機となりフローを経験しやすい特性を指している。

8-2-5 自己目的的パーソナリティ

フロー体験をしやすい特性をもつ自己目的的な人を自己目的的パーソナリティと呼ぶ。autotelic（自己目的的）な人は様々な状況でその状況を楽しむことができ、必要のない精神的な刺激を遮断する能力を持つ。その瞬間に関係すると彼らが判断したも

のだけに焦点を当てる能力を持つ。そのため自己目的的な人は活動を主体的に行うのでより環境から自主的である。より柔軟な注意力をもち彼らはより簡単に経験を構築することを可能にする” (Csikszentmihalyi, 1990)。また石村 (2008) も “最適な挑戦水準での状況を楽しみながら、個人の能力を高めることのできる人であることを示唆している。

つまり自己目的的な人は自分の興味のあることにより注意力を注ぎそこから得た情報を判断するので主体的であり、受動的な情報に振り回されず自らの経験を作っていくことが出来る。反対に自己目的的な特性の低い人を外面的な環境の情報にたよりすぎて注意を向ける焦点が拡散しているような人は自分の考えをあまり制御できないだろう。とチクセントミハイ (1990) は述べている。さらに自己目的的な人にはいくつかの特徴があるとして

①自己目的的な人の精神的エネルギーは尽きることがないように思える。彼らは身の回りで起こることに多くの注意を払い、より多くのことに気づき、リターンを期待することなくその物事に対して集中する。②自己目的的な人は自分自身に対する関心(恋人のことや買い物や成績等)は相対的に低く、より多くの精神的エネルギーを人生における経験に注ぐ傾向がある。③創造的な人は同時に自己目的的でもあるがそういった人は些細に思えるような事柄に対しても投資できるような余剰の精神的エネルギーを持っている。

一方、自己目的的な特性は生得的よりもむしろ学び得ることが出来るものである。フロー体験は生得的にモチベーションの低かった人のモチベーションを上げるとしている (Csikszentmihalyi, 1990)。また “自己目的的パーソナリティは自己決定をして自発的に取り組むことが内発的動機づけにつながり、自己目的的になりやすい。自らの意思で取り組むその意志の強さがフローを生む (浅川 2009)。” このことは逆のこともいえ、フロー体験は内発的動機づけを高めフローを体験した人の自律性を促進して物事に自発的に取り組むことを促す効果もある。チクセントミハイ (1990) も同じように指摘する。“私たちが面白いと感じている物事の多くは元々そうだというわけではない。私たち自身がそれらに対して注意を払う努力をしてきてからこそ、それらを興味深く感じるのである。私たちの注意を引きつける外的な刺激や困難を待つことなく、自らの意思で物事に対して集中する力を身につける必要がある。何であれ自分が楽しいと感じられること、そのプロセスで自分の知識を増やしていけるような物事を選んで、結果ではなくそれそのものを楽しみ、自分自身の注意をコントロールする術を学んでいくことがいい訓練になる。” さらに “普通の経験をフローに変えることは簡単ではないがほとんどすべての人はフローに変えるための能力を高めることが出来る” (Csikszentmihalyi, 1990)

としている。

8-3 想像力と技術の再帰性

以上の概念を踏まえつつ、木村のキャリアを通じてスノーボーダー達の活動を観察するとスノーボードを行う際に非常に創造的であることが分かる。その他の研究で関わったスノーボーダー達にも同様のことが言えると考え。フィールドワークを通して得た知見においてスノーボードに関する創造力という面では木村よりも優れたものもいた。

そしてその想像力、発想力はスノーボードの技術レベルが高ければ高い程豊かである。そのスノーボードの技術レベルも1つの種類が高いということではなく滑るということ全体の技術の全てを含む。

技術の上達がビジョンを見る想像力を生み、その想像力が技術の向上を生む。例えばゴルフのトッププレイヤーはフローに入った時にはコースの先に未来のプレーをしている自分つまりビジョンが見え、その通りにプレーをするだけの状態になるという⁵⁴。

そういった能力とも関連する想像力は何もない所からルールを作り、そのある程度制限された中において、余計な事を考える必要が無くなると人は集中することができる。そして技術の向上が起きる。またそのルールを作るには想像力が必要となる。そのため想像力と技術の向上のどちらが先かという問題はなくなる。以上からルールを作る想像力、その想像力と技術の向上の再帰的な関係が存在すると考える。

スノーボード以外の一般的に認識されているスポーツにはルールが存在する。スノーボードと他のスポーツにはその違いが大きくある。

ある程度制限された中で余計な事を考えることができなくなると人は集中ことができ、技術の向上が起き、その制限を変更する想像力によって再帰的なループが発生するのではないかと考える。

おわりに

本研究は私が2012年に受けた現代社会理論の講義がきっかけで生まれました。私は高校を卒業してから夏にアルバイトをして冬にスノーボードをしていました。怪我をきっかけに本を読み始め、大学を受験することを決めました。何度かの受験を経てSFC

⁵⁴ James E. Loehr 1991 Mental Toughness Training for Sports: Achieving Athletic Excellence (Plume): Plume; Reprint (訳) スキャンコミュニケーションズ『スポーツマンのためのメンタルタフネス』, 1998を参照。

に入学しました。自分なりの意思でこうした選択をしたつもりでしたが、小熊英二先生の講義と本を読むうちに、自分が何故ここにいるのかという気付きをいただきました。こうした気付きを得ることができたことを本当に感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献(脚注で触れたもの以外)

浅川希洋志・ミハイ・チクセントミハイ『効果的 e-Learning のためのフロー理論の応用』, Hosei University Repository, 2009

浅川希洋史 日経 BP2009 「充実感」を感じやすい人、できない人

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/life/20090608/197029/?P=1>

浅川希洋史 日経 BP2009 プレッシャーを力にできる子どもの育て方

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/life/20090608/196999/?P=4>

アンソニー・ギデンズ, (訳) 松尾精文, 小幡正敏『近代とはいかなる時代か? -モダニティの帰結-』, 而立書房, 1993

池内慈朗『ハワード・ガードナーの創造性理論および米国における

関係諸理論』, 美術科教育学会, 美術教育学, (30):157-166 199802, 1998

石村郁夫 2008 フロー体験の促進要因とその肯定的機能に関する

心理学的研究筑波大学人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻博士論文(心理学)

今井賢一, 金子郁容『ネットワーク組織論』岩波書店, 1988

井上峻, 中村祥一, 橋爪紳也, 永井良和, 平川茂, 塩沢由典, 小川博司, 奥野卓司, 竹内成明, 平野秀秋, 藤村正之『仕事と遊びの社会学』, 岩波講座, 現代社会学, 第 20 卷, 岩波書店, 1995

井上俊, 伊藤公雄『文化の社会学』, 社会学ベーシック, 第 3 卷, 世界思想社, 2009

ウルリヒ・ベック (訳) 東廉, 伊藤美登里『危険社会-新しい近代への道』, 法政大学出版, 1998

小川純生『遊びは人間行動のプラモデル?』, 経営論集, 第 58 号, 2003

勝野龍輝『エクストリームスポーツ競技者の心理特性 ~スノーボード競技者への面接調査から~』, 早稲田大学スポーツ科学部卒業論文 b, Psychological characteristics of X-sports players1K04B056-7, 2007

金子郁容『ネットワークへの招待』, 中央公論社, 1986

昆野安里子『自己雇用者のネットワークスタイルとネットワーク研究』, 慶應義塾

- 大学大学院, 政策・メディア研究科, 博士論文, 2006
- クリストファーピーターソン (訳) 宇野カオリ『実践入門 ポジティブ・サイコロジー 「よい生き方」を科学的に考える方法』, 春秋社, 2010
- サスキア・サッセン, 訳者代表, 森田桐郎, 『労働と資本の国際移動』, 岩波書店, 1992
- 佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』, 新曜社, 1984
- ジェラルド・カーティス, (訳) 山岡清二, 大野一『代議士の誕生』, 日経 BP 社, 2009
- 島居哲志『ポジティブ心理学入門』 -幸せを呼ぶ行き方-, 星和書店, 2009
- 杉山卓也・猪俣公宏『Flowおよびその周辺概念に関する質問紙作成に向けての量的研究』, 中京大学体育学論業, 2003
- Csikszentmihalyi, M. 1997 Finding Flow Basic Books
- MihalyCsikszentmihalyi 1990 Flow—the psychology of optimal experience
—, Harper Perennial
- Mihaly Csikszentmihalyi 2004 Creativity, fulfillment and flow YOU TUBE TED
IDEASWORTHSPREADING
<http://www.youtube.com/watch?v=fXIeFJCqsPs>Rita L. Atkinson, Richard
- チクセントミハイ, M. (訳) 今村浩明『楽しみの社会学 新思索社』, 2000
- 鄭賢淑『日本の自営業層-階層的独自性の形成と変容-』, 東京大学出版, 2002
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 2002 Handbook of Self— Determination Research. Rochester,
NY : The University of Rochester Press.
- ディック・ヘブディジ, 山口淑子『サブカルチャー-スタイルの意味するもの』, 未来社, 1986
- 中西聡『日本経済の歴史』, 名古屋大学出版会, 2013
- 西村清和『遊びの現象学』, 勁草書房, 1989
- 監修 (財) 日本レクリエーション協会, (編) 増田靖弘 (代表)『遊びの大辞典』東京書籍株式会社, 1989
- 監修 (財) 日本レクリエーション協会, (編) 増田靖弘 (代表)『遊びの大辞典 [実技編]』東京書籍株式会社, 1989
- 編・監訳者, 野沢慎司『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 2006
- ピエール・ブルデュー, (訳) 石井洋二郎『ディスタンクシオン-社会的判断力批判 I』, 藤原書店, 1990
- ピーター・L・バーガー, トーマス・ルックマン『現実の社会的構成 知識社会学論考』, 新曜社, 1977

- マーティン・セリグマン（訳）小林裕子『世界でひとつだけの幸せ ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生』, アスペクト, 2004
- 宮台真司『サブカル「真」論』, 株式会社ウェイツ, 2005
- メアリー・C ブリントン, (訳) 池村千秋『失われた場を探して-ロストジェネレーションの社会学』, NTT 出版株式会社, 2008
- 森岡清美, 井上俊, 斉藤次郎, 中野収, 川崎賢一, 石川実, 天野正子, 鶴見俊輔, 大村英昭, 正岡寛司『ライフコースの社会学』, 岩波講座, 現代社会学, 第9巻, 岩波書店, 1996
- 柳川範之『40歳からの会社に頼らない働き方』, 筑摩書房, 2013
- 山下祐介『限界集落の真実-過疎の村は消えるか?』, 筑摩書房, 2012
- ユルゲン・ハーバーマス, (訳) 細谷貞雄, 山田正行『公共性の構造転換-市民社会の一次カテゴリーについての探求』, 未来社, 1973
- 吉田毅『競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究』, 道和書院, 2013
- ロナルド・K・シェルフ, (訳) 佐藤浩『サービス取引の自由化』, 日本経済新聞社, 1982
- ロバート・B・ライシュ, (訳) 清家篤『勝者の代償』, 東洋経済新報社, 2002